

LA REVUO L'ORIENTA



エスペラント語研究雑誌「ラ・レヴオ・オリエンタ」

MONATA ORGANO DE JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

JARO VIII
N-RO 10

第八年 第十號

SEPTEMBRO
1927

目次 (ENHAVO)

話さるゝ言語と書かれた言語.....	TH. CART.	257
TRA ESPERANTUJO		
東宮氏を偲びて.....	吉川貫夫	258
内地報道(大會迫る).....		260
POR LERNANTOJ		
エスペラント初歩講義.....		264
薔薇〔初等註譯〕.....	松本清彦	266
科學のエス語.....	川崎直一	268
手紙のエス語.....		269
單語研究雜話.....	川崎直一	270
Ido語に分裂崩壞の兆?.....	矢戸圭一	271
新刊紹介.....	堀真道	273
和文エス譯添削欄.....		275
米國よさらば〔滯米日記拔萃〕.....	小坂狷二	276
LITERATURO		
自然〔荻原井泉水作エス譯〕.....	佐々城松榮	278
詩三篇.....	井上、前田、吉野	279
生ける日本をみよ.....	井上萬壽藏	280
緑の旅より.....	淺田一	282
俳優優〔エス原作戯曲〕.....	中垣虎兒郎	283
リングヴァイ・レスボンドイの譯.....		287

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO, TOKIO, Uŝigome, Ŝin'Ogaŭamaĉi III-14

東京市牛込區新小川町三ノ十四 財團法人 日本エスペラント學會

[Jara abono internacia 7 svisaj frankoj]

★ 編輯後記 ★

★増刊発行以来おくれた Revuo の発行日をやつと十月號でとりもごせる見込がたちました。今度からは再びこんなことのない様注意します。

★十一月末には小坂氏もお歸りになりますから編輯部の陣容もさゝのひませうし、諸事すべて徹底的に積極的にやりたいと思ひますから、同志諸兄の御援助を只管お願い致します。

★西博士の倫敦塔も前月號を以て完結(いづれ單行本として出る筈)。今月は中垣君の力作 Akitoro がのりました。來月號で完結。來月の分が特色のある所です。

★Literature 欄へ寄稿を願ひます。尙科學のエス語、初等註譯、其他何によらず御寄稿を歓迎。(別項参照)。

★大会が近づきました。大会のプログラムは内地報道中へのせてなきました。九州の天地が我々をむかへています。西へ。福岡へ。長崎へ。

★下記の如く松永氏のエスベラント 獨唱があります。在京の方は奮つて御出席を。

★東宮君の遺兒教育後援會が生まれました。奮つて同志諸兄の御賛同を祈ります。(公告参照)[七月號197頁其他に横山氏としたのは古澤(末治郎)氏の誤です。目のまはる様な編輯をやつたので同氏の舊姓を不注意に書いたのです。同氏及諸兄に深謝します。]

★和文エス譯添削欄を設けました。ふるつて御参加を。

★今月から松本清彦君に編輯を大いにやつていたゞくことにしました。

日本エスプラント學會編輯部

REVUE ORIENTA 原稿募集

- (1) なるべく一回もしくは二回で終るもの。
 - (2) どんなものでもよろしい、とにかく Revuo Orienta にだしてよからうと御考へになつたものを。
 - (3) なるべく一頁か二頁となる様な風に作つて下さい (一頁 1800 字位に)。
 - (4) Literaturo 欄へのものはなるべく日本の作品の事。(譯文には原文をそへられたし註釋はこちらで書きますから)。専門學術上のものは術語に和譯を附されたし。
 - (5) 原稿の取捨は當方編輯部にて決定。掲載せないものは御申出があれば何時でもお返し致します。
- (學 會 編 輯 部)

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★
★ エ ス ペ ラ ン ト 獨 唱 ★
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

松永春一氏獨唱會 (9月24日夜6時 於神田駿河臺主婦之友社)

公衆を前にしてエスぺラントの歌の獨唱された事はある。併し個人の獨唱會で歌はれることは今回が始めてである。我々同志にとつてよろこばしい事だ。

しかも同氏の言によれば、同氏今回の擧は氏の心の底に潜む藝術が欲求して止まないエスベラントによる表現になつたこの事。氏は十數年米國にあつて聲樂及ピアノを研究し、紐育メトロポリタン・グランドオペラに於て、かのカルーソー等と合唱したブリマドンナ Mme Marracci に學んだ tenoristo である。

今回は同氏歸朝後第一回の獨唱會である。この榮ある門出に我がエス語の歌が歌はれる事は嬉しい事である。

PROGRAMO: 第一部 英語の小曲と自作した日本語の小曲。

第二部 エスペラントの歌三曲 (Migra Kanto, Lasta Rozo de Somero, Nia Ĝardeno) と得意のグランドオペラもの数曲。
伴奏 塚本越夫氏、他に石川義一氏が賛助の意味でピアノの
獨奏をなす。

LA REVUO ORIENTA

★ JARO VIII, N-RO 10 ★ MONATA ORGANO DE J. E. I. ★ SEPTEMBRO, 1927 ★

話さるゝ言語と書かれた言語

エスペラント學士院長 TH. CART

Matton 將軍が言語が *vivanta lingvo* (生きた言語) であるためにはその語を常に話されなければならないといつたのは尤もなことである。

實際人々がその言語を殆んど本能的 (*instinkte*) に語る時に於て言語は完全に生命があるのである。生き生きした談話に於ては本能は理性 (*rezonado*) よりも遙かに大きな役目をなすものである。

談話に於て言語の本質的生命が存在するのである。

併しこの事がある人々達 (Bally 教授もその著 “*Le Langage et la Vie*” によると同じくその仲間に入るらしいが) が信ずる如く我々の現代の文化的言語の進展 (*evoluado*) が大部分この話さるゝ言語 (*parolata lingvo*) から結果したものだといふ事を意味するものだらうか。

否、そうではない! 若しそうとするならば、南獨逸の言語の進展は北獨逸のそれとは全く別個のものであり、西フランスの言語は東フランスのものちがひ、ロシアの各地方の言語も、又各地に散在する英領殖民地に於ても言語が甚だちがつた *evoluo* をさる筈である。しかし事實はそうではない。實に印刷術の發明とその普及以來益々「書かれた言語」 (*skribita lingvo*) が言語を同じくする總ての民衆にまつて眞の共通語となりつゝあるのである。

口で話される語彙はすぐ變化してまもなく消滅するものである。そしてたゞ日常の文獻の中へ入つてくる事に成功した語のみが引續き生存するのである。併し常にこうさといへ

ない。我々の時代における我々の言語の進展の要素 (*faktoro*) は殆んど専ら新聞雜誌である。新聞雜誌は常に自分の *esprimo* (云ひ表し方) を一般人に採用さすといふわけではないが新聞雜誌が採用しない *esprimo* は全然勝利を得る日がないのである。

従つて我がエスペラント語と他の文明國の生きた言語との間に何等本質的の差違がない。(人々はエスペラントを人造語と非難する。併しすべての文化的言語は皆大體人工的であつて *inteligenta volo* の強い影響をうけて益々人工的になつてゆくのである。故にエスペラントと所謂自然語との間の差違は本質的でなく程度の差にすぎない)。故にエスペラントにまつても他の言語に於けると同じく自然の發展 (*natura evoluado*) をそんなにおそれることはいらない。——この自然の進展がなくては言語に何の生命もなくなりたゞ人工的反自然的術學的進展となり全く創造力をそれが存在せず又存在し得ない方面へ無理押におしつけてしまひ我々の言語から *demokrata forto* (民衆力——この力のお蔭で我々の言語がいろんな障害にも拘らず嚴然として目ざめる現代世界に挑戦してゐるのだ) といふものを奪ひさるゝこととなる。

こゝに於て我々雜誌に關係してゐるものはこの我々のたづさはる新聞雜誌といふものが言語の進展上大きな役目をなすもの故我々の責任の重大なることを自覺して大いに自重して (用心深きこと: *singardemo*) 我が *Zamenhofa Esperanto* の *unueco* を常に確保しなければならない。(El “*Vortoj de Prof. Th. Cart.*”)

東宮氏を偲びて

小田原 吉 川 貫 夫

私が見得た東宮豊達氏は童顔瘦軀扶蓉之氣
博學多識天稟之器とでも云ふのでしょうか、
自分の心持ちを示すのにさえ其の言ひ現はし
方も知らない私が東宮氏に對する憶ひ出話な
どをするのは氏に對して無禮かとも思ひます
が、私を知りぬいて居た故人は其生前私に用
ゐた「微苦笑裡の默殺」だけで宥るして呉れ
ると思ひますし又本誌前號の古澤氏のエス文
追憶談や其他の記事で故人の如何なる人で有
つたか又どんな業績を遺されたかは已に諸君
の知悉せらるゝ所でも有り私の爲めに故人が
他から過まられる事も無いと思ひますから憶
ひ出の儘を話させて頂きます。

大正九年の十一月頃でした。静岡の同志岡
部源吉氏が此の小田原で生活する事となつた
のが動機で、エス界の爲少しでもこの考へか
ら講師たるべき人の派遣を學會の小坂さんに
照會の結果が今は亡き東宮豊達氏に師事する
事となり延いて同氏の努力で小田原にも學會
支部が設けられ店頭迄迄緑の星のビラを見る
様になつたのでした。

氏がエスペラントに熱中し始めたのも此の
機縁による事は度々私に物語られました。爾
來六年半の間氏の足跡の印する所必ず講習に
寄稿に演述に宣傳指導否な奮戦苦闘を繼げ而
も大震災の後の此の約四ヶ年は病院經營に別
府、中野、庄原、勝山と轉々安住を得られな
かつたのですが之れ等を通じての僅か六年半
の其の間にあの羸弱な身を以て彼れ丈けの業
蹟を後世に遺された事は私には只奇蹟とより
外には考へられません。エスペラントを生命
とせられた故人について私の様なものの話な
ぞは井の底の蛙が空の話をする様なもので
すから其方面はやめまして同氏の人格の一端を
物語る様なお話を申し上げたいと存じます。

東宮氏が小田原在住中醫師の免狀をもたれ
ながら何もしてをられないので私は自宅開業
の事をお奨めしました所が

「開業して若し患者が多くなりすぎると僕
の事業たるエスペラントに費すべき時間がな
くなるおそれがあるし、又自宅開業は醫者其
人を絶對的に信用して來る患者許りなのだか
ら、若し手を離せない様な患者が同時に二人
も三人も出來た場合自分の職責がつくされな
いから自分の良心が許さない、あなたはそん
な場合代診をおけばよいと云はれるかも知れ

ないが、代診はあくまでも代診であつて、自
分自身が診るのでないから患者に對して申譯
がない。」

と云はれてどうしても承諾せられなかつた。
何たる清い何たる尊ひ心を持つてをられたか
はこの一言でよく判ると思ひます。我がザメ
ンホフ博士が開業早々一少女の臨終の床に侍
した際、悲嘆の餘り亂心せんばかりに泣き叫
んだ其母親の聲が一週日の餘も耳から離れな
いので、自分は到底内科醫として屢々こんな
悲慘な場合に出會することは堪えられないと
考へて、眼科醫として醫業に従はん決心し
てウィーンに眼科專攻にでかけたといふ話を
(ブリツア氏のザメンホフ傳による)きいたが
それとこれとは事柄が異つてゐるが共に純眞
の人格を示す好例であると思ひます。

其後屢々我々同志や知人が醫は仁術であり
濟生の一つだからぜひ自宅開業をせられよと
勧誘した結果、それではといふのでやつと開
業の事は承諾されたが、自分は別にこれで
どうといふのでないからといつて、藥代や治療
代と云ふのは全くの實價しかとられなかつた
ので一日分二錢とか三錢とか云つた藥代もあ
つた様でしたが、患者の方からどうか普通の
藥代をさつていたゞかないと却つて御世話に
なり難いといふ風なことを申出たが、仲々頑
として應じられなかつた。或日突然私に

「實は面倒な事が惹つたのです。どうして
も土地の醫師會へ入らなければ死亡診斷書が
みさめられないこの事なのです。醫師會に入
るのは自分として何でもないが、醫師會へ入
つた以上は協定の藥價や診察料を受けないと
五百圓以下の罰金になるこの事で、自分のこ
れ迄の主張と一致しないので大變困るがどう
したものだろう。五百圓の罰金が一度で済む
ものなら一度だして從來通りでやつてゆくが
藥價を安くした其都度罰金をとられる様では
とてもたえられないから何とか工夫はなかる
うか。」

と相談されたのでした。私は笑ひながらそれ
はやはり醫師會へ御入りになつて世間並にせ
られる方がよいでせう、醫師が患者につくす
親切といふのは外にいくらでも道があるのだ
からと云つて、やつと納得してもらつたので
した。この言葉が如何に同氏の心が美しかつ
たかを示すものではありますまいか。

透徹した頭腦の持主だつた同氏がまた純情玉の如き心を抱かれ、常に自分の一家に對し慈母弟姉に對してできるかぎりの努力をつくされてゐたが、これほどの立派な人格の人に對して何として天が長壽をかさなかつたのでせう。同氏の健康状態は常に良好でなく、大震災後は家庭の事情から各地の病院に勤務する様になつたのを見て、同氏の健康状態をしる我々は甚だ心を痛めました。貴子夫人の心からの御努力は餘外目にも涙なしにはみられませんでした。

庄原病院を辭して間もなく其衰弱の有り様を見た私は遂に黙し得ず「資産の一部を處分せられてでも絶對の靜養を」と熱望致しました時故人は其事の心の進まざる理由を淳々として説明せられましたが、故人の眼は曇り勝でした。私は只「それでは何は兎も角又再び都合よき病院をでも」と希望するより外は有りませんでした。凡夫の私の胸は裂ける思ひが致しました。

間もなく氏の理想通りに經營し得る病院の話が出来たのでそれなれば健康の恢復も可能の事だと喜びましたが、時は已に遅かつたのでした。ほんの束の間で之れも捨て、小田原で療養する事となり、當時氏の慈母は病氣入院中の爲め氏は東京を素通りでの來原の事でしたから、品川驛迄出迎へましたらエルザ嬢と夫人と其弟妹が同乗し車外には夫人の母と姉と同志古澤氏が居ました。私が乗り込んだ時も車の内外で互に顔を見合せては只何の事は無しに泣きました。萬感胸にせまるまでも云ふのでしよう。

私は此の時から「東宮豐達氏の死」と云ふ語るにも言葉のない苦しい思ひの爲めに胸を痛め爾後病勢の一進一退は有りまして私の心の底には只悲しい日の一日も遅かれと祈る許りでした。

主治醫の診療以外に氏は常に自ら自分の身體を診察して居ましたが、六月十一日に至つて恢復に對し疑を生じ、六月十七日には再び起つ能はざる事を内密に含み置く様、私に依

頼が有りました。私は主治醫も未だ見はなしてゐられないのにと氏をばげましたが、氏は從容として自分も醫師として外部から他人の病を診察してゐつては或はまだ望みがある様に診るかもしれぬが、自分は醫師として自分の身體を内部から靜かに觀察してゐるのだから、たとへ外部からの診察だけこちがつて却つてまちがひのないものである。といはれ透徹した理智の眼で冷かに自分の死そのものを觀察してゐる同氏の態度は實にみあげたものでした。爾來度々の遺言に言はむと欲する全部を盡され、二十二日の午前十時に餘命は二時間で如何なる方法を執るも只徒らに多少の猶豫を生ずるのみなる事を自ら宣告して改めて家人全部を枕邊に集めて一々握手して從容何ら迫る處無く永別の辭が有りましたが、其處には勿論エルザ嬢を擁した貴子夫人も居られました「せめて安らげき眠りを」と覺悟せられた夫人の其態度には何として泣かずに居られましよう、總ての人をなだめ慰め勵まさればならぬ私も隠しきれぬ涙が溢れ出るのをごうすることもできませんでした。

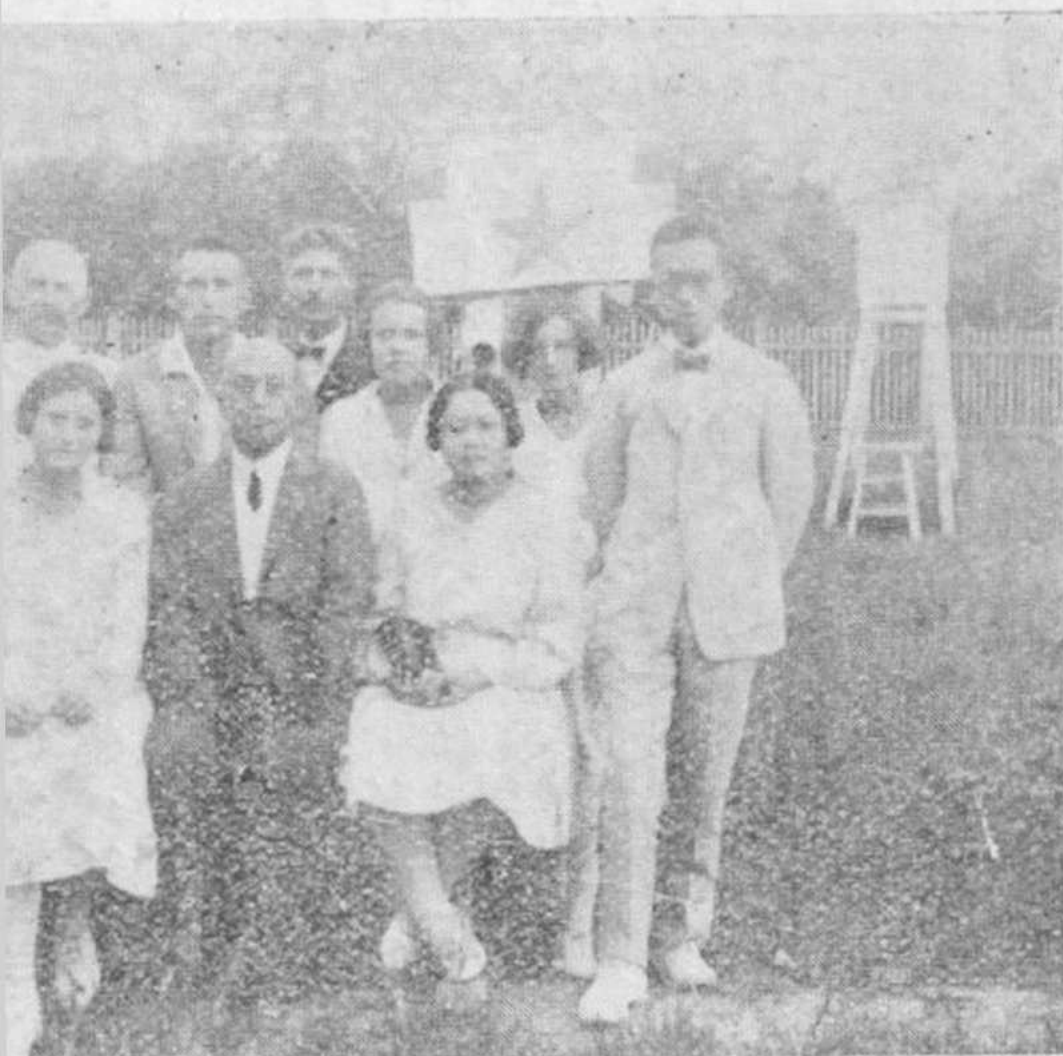
かくも安靜に死を待ちながら世事を物語る同氏の心を察し得ないのでは無いが周圍の人の氣分も考へて注射その他姑息な手段は何の役にもたないからやめてもらひたいといはれた氏の言葉に對して心苦しくはあつたが、無理に氏の許るしを得て、猶注射やその他種々手を盡したが翌二十三日午後十時に氏は微笑を以て「既に全く生命力なし爾後は只注射藥の時間的効果のみ」と言はれて注射を受け眼を閉ぢ手を組み平素の眠りの通りに見えましたが、僅か四時間で二十四日の午前二時殆んど眠つた儘で、永のお別れとなつたのでした。

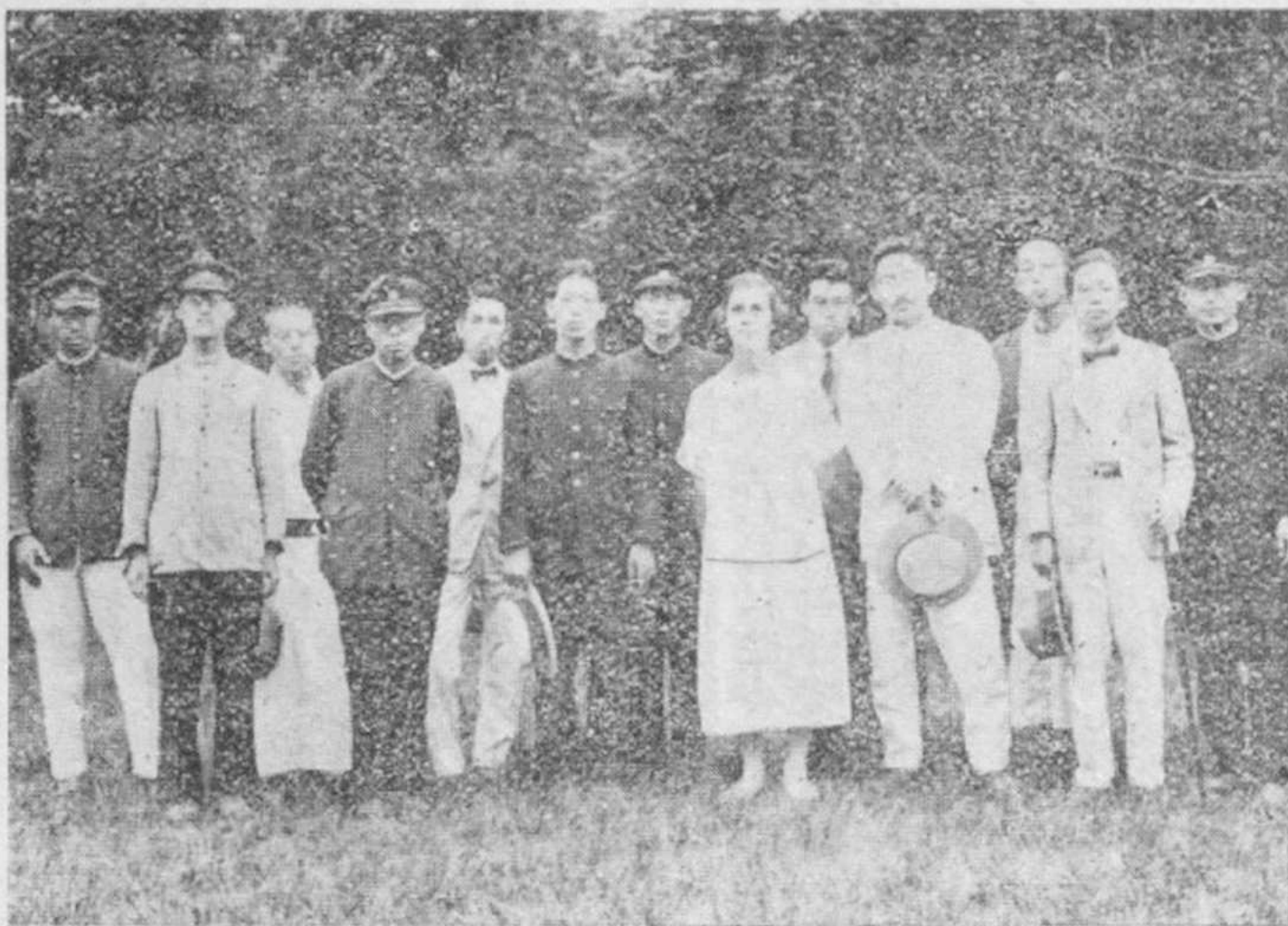
自分の診察に依つて死を明瞭に知り、冷靜後事を處理して常と異る無く談笑裡に其の期の至るを待たれたのを見て、故東宮豐達氏が只に高潔達識の人と言ふのでは無く、眞この偉人で有つた事をしり、今更ながら一層哀惜の情に堪えない次第であります。

既報の如く故東宮氏の知友によつて別項公告（本誌廣告面第一頁）の如く遺児エルザ嬢の教育後援會が設立されました。何卒同志諸君の御援助御参加をおすゝめ致します。猶右後援會ではこの外同君が生前熱望していた『惜しみなく愛は奪ふ』のエス譯を出版の上寄附された方々へお頒ちすれば大いに故人の靈をなぐさめることができると思へられ「後援會自身出版をする事は全く不可能故學會で出版してもらへないか」と我學會へ御申出があつたので過日評議員會を開き相談の結果後援會にて寄附者の數だけの部數を引受けて下さる事故出版を引受やうとの決議を致しました。そして本月中には全部原稿を整理して來月から植字にかゝる事となりました。本年中には出版の運びになります。（學會）

緑星だより

【寫眞説明】——「右上」ハルピンの同志と大石高層氣象臺長。前列中央大石氏左端パブロフ氏右端岡田實氏。（記事参照）「右下」富山の同志と柳田國男氏。前列左より仲村、松本清彦、辻圖書館長、柳田氏、右端奈良。後列左より駒見、五十嵐、川岸堀田、松本常重、岩田、藤澤、西野、北川の諸氏。「左上」今夏輕井澤で開いたエス・クラッピーダクルーボのエスベラントヘイモの一同。（ベナヅルス氏邸にて）右より林、古澤、川崎、西博士、鈴木、ベナヅルス夫人、田邊、矢戸、浦、瀬水、山本、片山、白岩の諸氏「左下」龜岡で開いたエス普及會の夏期講習會員一同。





福岡へ！ 秋の九州へ！！

~~~~~十月十五日十六日十七日福岡市に開かれる

第十五回日本エスペラント大會迫る~~~~~

~~~~~十月十八日十月十九日長崎市で大會二次會開かる~~~~~

我等の大會がちかづいてきました。博多の海は千年の昔元軍を蹴ちらした昔語を波音にあはせて物語つてゐます。徳川三百年間西歐文化に向つてひらかれた唯一の眼たりし長崎の港に残る所謂南蠻の遺蹟は何を語るでせう。九州の天地は等しく我々の來遊をむかへてゐます。

★ 福岡市に於て ★

10月15日(土) 19時 エス宣傳講演會(市記念館にて、芬蘭公使ラムステッド博士外數氏講演)

10月16日(日) 9時 大會發會式(福日講堂にて、九州帝大總長其他の祝辭あり)
(地方代表挨拶もあり)

12時 晝食(費50錢)

13時 協議會
エスペラント雄辯會

18時 懇親晚餐會(市内舊柳町新三浦屋にて(費2圓——博多名物水たき)

10月17日(祭日) 遠足——博多灣奈多濱にて鯛網引き諸囀等

9時 新博多驛集合、臨時列車にて奈多へ直行(會費一圓——但汽車晝食其他の費用) 18時解散

【注 意】

- ① 汽車は省線博多(27)驛下車の事。
- ② 記念館は市内電車天神町下車左へ二丁。
- ③ 地方代表挨拶——時間節約上一人2分間の事。
- ④ 協議會——協議事項は9月30日迄に提出の事。
- ⑤ 分科會——今年は雄辯會を催すため中止。但特に希望の方は申越下さい。遠足の日に都合します。
- ⑥ 雄辯會——新な試みですが、演説希望者は9月30日迄に御申込の事。
- ⑦ 合宿所——市内福岡橋口町の海容館とします。宿泊料は15, 16日二泊(但15日夕食、17日朝食付)にて3圓50錢。一泊と朝食で2圓。尙婦人の宿泊は當方婦人部でお世話します。
- ⑧ 參加希望者はハガキにて下記の形式で「福

岡市大名町3の105 日本エスペラント學會福岡支部」宛に申込の事。

大會參加申込書

1. 氏 名
2. 住 所
3. 到着日時
4. 出發日時
5. 宿泊(合宿希望其他に付)
6. 備考(a)代表として挨拶
(b) 雄辯會で話したし等
.....

汽車割引券入用の方はその枚數を明記して申込の事。尙すべて大會に關する御問合せは上記「日本エス學會福岡支部」へ。

⑨ 汽車の割引を大いに利用して下さい(別項参照)。

大會參加費用調べ

| | |
|----------------|----------|
| 各地より博多驛迄の往復汽車賃 | x |
| 15日より17日迄の宿泊料 | 3.50 |
| 16日中食 | 0.50 |
| 晚餐會費 | 2.00 |
| 奈多海岸遠足費 | 1.00 |
| | $x+7.00$ |

大會後旅行團組織

遙々大會に参加せられた方々は秋の九州にその旅情をそゝられることと思ひます。大會準備會はこれらの方々の爲に特に karavano を組織し九州の三大勝地——雲仙嶽、阿蘇山、別府——への三班に分つてお世話致します。大體の豫定と旅費は

1. 雲仙行(二泊)(Postkongresoに合併) 15圓
2. 阿蘇行(一泊) 10圓
3. 別府行(一泊) 10圓

尙詳細は御照會の事。

★ 長崎市に於て ★ (POSTKONGRESO)

10月17日(祭日) 奈多濱の鯛網の遊びを早目に切りあげて 16時44分博多驛發(長崎行終列車にて) 23時長崎着

10月18日(火) 午前、午後共長崎市内見物。(切支丹ころび、唐人物語、阿蘭陀屋敷さいつた幕府時代の遺蹟を訪れる) 都合により郊外茂木へ遠足。夕方長崎エス倶楽部の歓迎晚餐會開催。(急ぎの方は23時の夜行(門司行)にて出發)

10月19日(水) 特に希望者を募り日本新八景の一たる雲仙岳へ登山

5時35分 長崎發、雲仙に到着の上新湯、古湯にて一浴 Golfudejo を經て普賢岳の絶頂を極めて下山、繪の様な不知火海岸の島原へ自動車で快走

21時29分 島原發

23時23分 諫早驛着。こゝにて省線門司行(24時12分發)列車にて歸東

注意: (1) Postkongreso 參加御希望の方は豫め通知下さる方便宜です
(2) 安い合宿所又は適當な宿をお世話致します

★ Postkongreso についての御照會はすべて

長崎市銀屋町 56

日本エスベラント學會長崎支部へ

★ 參加者へ汽車賃二割引の特典 ★

吉例により本年も大會參加者に對し鐵道省では汽車賃を二割引してくれます。

★但し必ず往復切符を買はねばなりません。(ですから例へば東京から長崎へいつて歸りに大阪で二三ヶ月滞在する様な人は、東京から大阪迄普通切符を買つて、大阪で下車して長崎へ往復切符を買へばやはり二割引になります。)

★それから割引を受けるには割引證が入用です。割引證は一枚一人一回限りですからその回数に應じて何枚も請求下さい。割引證は上記日本エス學會福岡支部へ枚數を明記して御請求下さい。御送りします。

★割引は哩數に制限なく全國のどの驛(鐵道省線ならば)からでもできます。そしてその驛から博多驛又は長崎驛(Postkongresoに參加の方は)への往復を買へばよいのです。

★割引證で切符を買へるのは10月1日から10月18日迄の間です。

★割引切符の通用期間は切符購入の日から10月31日迄(31日中に乗車すればよいのです)。

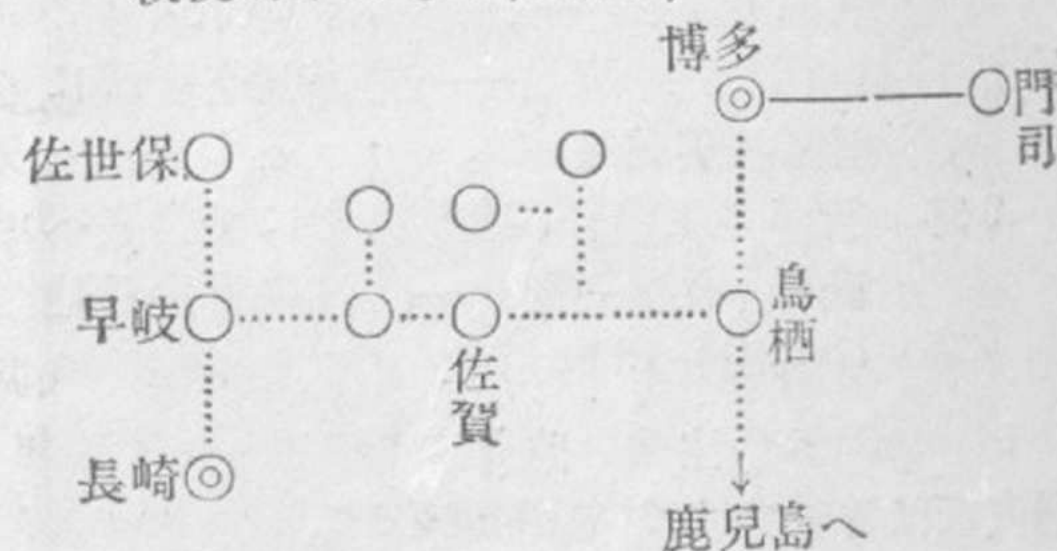
★エスベラント宣傳にもなりますし又割引證利用者の人數が少いと追徴金をとられますからぜひ福岡の近くの方でもこの割引證を御利用下さい。尚上記の次第ですから學生教師の方もぜひできるだけこの割引證を御利用下さい。

★福岡から二三時間の所におられる同志で大會中毎日福岡へ通はれる方は毎日割引を受ける事ができます。

★福岡と長崎の兩方に參加される方が割引切符を御求めになるには次の御注意を御覽下さい。

◇福岡以東から參加される方は初めから長崎迄の往復切符を買つて福岡で途中下車されると便利です。

◇下圖中點線で示した區間の各驛からお乗りになる方は次の例の如く一旦博多迄の往復割引切符をお買求めになり歸途分岐驛から長崎迄の割引往復切符をお買求めになるとよろしい。(つまり割引證を二枚使用することになる)



例、(イ) 鹿兒島からの方

- a. 鹿兒島——博多(往復)
- b. 鳥栖——長崎(往復)

(ロ) 佐世保からの方

- a. 佐世保——博多(往復)
- b. 早岐——長崎(往復)

(ハ) 佐賀からの方

- a. 佐賀——博多(往復)
- b. 佐賀——長崎(往復)

〔注意〕 割引證使用上の疑點は東京の日本エス學會へ御照會の事。

御 注 意

大會參加希望の方は此 261, 262 兩頁を切抜き御保存下さい。重複をさけるため或部分は來月號へ掲載致しませんから

道 報 地 内

横須賀

7月30日より不入斗郵便局にて初等講習開講。會員12名。主として「希望社」の人達。毎日曜晚一時間宛。★8月15日より海軍技手養成所にて短期講習二週間。毎日一時間宛。聴講者は同所員の外海軍部内の人計廿餘名。8月30日同講習終了に付茶話會を開きエスの歴史現況につき松葉氏話す。講師は兩方共松葉菊延氏。★清水少佐は吳づきになられ軍艦は「萩」です。

吳

8月20日私立吳英語學校にて同窓會辯論部主催辯論大會あり。聴衆200名。關口春夫氏は飛入りで移民人口労働問題とエスベラントの題下に演説し大いに聴衆の注意を喚起した。

栃木縣

★真岡町におけるエス展覽會★
8月14—17日の四日間真岡町の真岡クリスチャン教會で展覽會開催。出品は主にエス語で通信交換の葉書、封書、雑誌、寫眞等で坪井潔氏の集められしもの。入場者50名。世界各地より集つた繪葉書は特に參觀者を喜ばせた。講習希望者あるにつき講習會開催の豫定。新しく真岡エス會も成立の豫定(平賀氏報)。

名古屋

名古屋高等商業學校にて四月新學期に際し講習會開催。水野氏指導新しく15名の同志を得たり。猶同校一教授は共に講習をうけられ一週間の後立派にエス語を話され大いに氣勢をそへられた。同校學生の研究會は毎水曜。市民クラブにて。★毎火曜日夜の研究會は市民本位にて同所にて開催。兩方とも出席者毎回十數名。(白木氏報)
〔この報知は整理人の手違ひから所管違ひの所へはいつてゐたので掲載がおくれて申譯なし。〕

JODK

京城放送局では8月15日柳東基氏の「エスベラントの話」といふのを放送した。(桑原氏報)

ハルピン

6月以來當地へ参り候當地男女同志の母國語にもまがふ流暢なエス語には只感歎の外無之候。毎週日曜正午東支鐵道俱樂部に參集致し居り候。全員十數名。異郷の空に國際エスベラントの集合は又格別の味に有之候。去る7月3日高層氣象臺長大石和三郎氏(渡歐の)當地通過を機とし當地エス會主催にて同氏歡迎會を開催致し候其時の寫真相添へ(寫眞參照)右御通知に及び候。(岡田實氏より)

龜岡

エス普及會主催で8月1日から三週間シオン館にて講習會開催。全國各地より50名參加。講師伊藤、中野、大崎三氏(寫眞參照)。★★鳥取縣鹽見村で8月18日より十日間瑞詳會支部主催で講習會開催。講師山川英吉氏會員十名。★★高知市にて8月12日から十日間普及會高知支部及高知エス會主催にて開催。講師山田二郎氏。9名。★尙8月22日より高知城東中學講堂にて第2回開催。會員十七八名。講師岡田有對氏。★★8月26日より同縣赤岡町で一週間講習開催。講師山田氏。★★山形縣酒田町にて同地支部主催8月9—16日講習開催。講師遠田眞三郎氏。(エス普及會報)

富山

4月14日富山エス俱樂部創立。西堤町10松本常重(代表)氏方を事務所とす。★同月16日九大を辭任歸富の松本氏の歡迎會を催す。(アルプス食堂)★19日第一回例會を開き、以降毎週火曜晚會合。★22日“Hemio kaj Farmacio”誌に關係の者でRondetoを作り毎週金曜晚會合。★5月25日東京の小林東二氏來訪。★6月10日出町の醫師來訪。★6月11日岩田氏方にてAĉula kunvenoを開く。★6月20—24日富山圖書館にてエス講習會開催。講師仲村吉一、松本常重氏。廿餘名。★7月9日高校の平岡伴一助教授來訪。高校にてエス講義擔當の由。★7月28日柳田國男氏の來富を迎へ16時より佛教會堂にてエス普及講演會を開き、後茶話會を開く。東京松本清彦氏も出席された(寫眞參照)★8月2日松本(清)氏クラブ來訪。★8月12日川原次吉郎教授來富。松本、西野氏等同氏を訪問。★7月より8月に亘り松本樂器店陳列棚にエス語で集めた外國の子供の繪を陳列す。★8月28日女子師範附屬幼稚園同窓會で同上の展覽會をなし、エスの宣傳す。參會者250人。

横濱

8月29日8時櫻木町驛に來朝中の濠洲の同志 Percy Procter氏を迎へ商業會議所を訪ひ學會支部へも案内した。11時出帆の加茂丸に乗船歸國した。(椎橋氏報)(寫眞次號)。

京都

8月14日14時京阪地方の同志が比叡山へ遠足を催し琵琶湖畔で夕食を共にした。

ダンチツヒ 萬國大會記事は次號へ

エスペラント初級講座

第一講

守則

1. 初めエス文をよんで次の単語表によつてその譯をしらべるこゝ。
2. 意味の判らぬ所は何回も聲をあげてよむこゝ。
3. それでわかられば次の譯文をよみ説明をよむこゝ。

単語

1. korvo 鳥。
2. konstrui 建造す(家等を)。
3. nesto 巢。
4. insulo 島。
5. ido 仔。
6. transporti むこうへ運ぶ。
7. kontinento 大陸。
8. preni 手にとる。
9. ungego 大爪。
10. korvido 仔鳥。
11. ekflugi さびだす。
12. maro 海。
13. mezo 中央。
14. vojo 道。
15. laca 疲れたる。
16. komenci 始める。
17. rapide 急いで。
18. svingi 振り廻はす。
19. flugilo 翼。
20. pensi 考へる。
21. porti 運ぶ。
22. fariĝi なる。
23. plenaĝa 成人せる, おさなの。
24. rememori 思ひ出す。
25. peno 努力。
26. vero 眞實。
27. timi おそれる。
28. respondi 答へる。
29. kredi 信ず。
30. ellasi はなす。
31. ŝtono 石。
32. droni おぼれる。
33. laciĝi 疲れてくる。
34. lasta 最後の。
35. senti 感ずる。
36. nutri 養ふ。
37. senforta 力のない。
38. maljuneco 老年。

KORVO KAJ KORVIDOJ

Korvo konstruis sian neston sur insulo, kaj kiam la idoj jam estis grandaj, li volis transporti ilin sur la kontinenton. Li prenis per la ungegoj unu korvidon kaj ekflugis super la maro. Kiam li estis en la mezo de l' vojo, li jam estis laca, komencis malpli rapide svingi la flugilojn kaj pensis: "Nun mi estas forta kaj ĝi malforta, mi portos ĝin trans la maron; sed kiam ĝi fariĝos forta kaj plenaĝa kaj mi estos maljuna kaj malforta, ĉu ĝi rememoros miajn penojn? Ĉu ĝi portos min de unu loko al alia?" Kaj li demandis la idon: "Kiam mi estos malforta kaj vi forta, ĉu vi portos min? Diru al mi la veron!" La korvido timis, ke la patro ĵetos ĝin en la maron, kaj respondis: "Mi portos." Sed la maljuna korvo ne kredis al la filo kaj ellasis la idon el la unugegoj. La korvido falis kiel ŝtono kaj dronis en la maro. La maljuna korvo sola revenis sur la insulon. Poste li prenis duan idon por porti ĝin trans la maron. Ree li laciĝis en la mezo de l' vojo kaj demandis la idon: "Ĉu vi portos min de loko al loko, kiam mi estos malforta?" La ido ektimis, ke la patro ĵetos ĝin en la maron, kaj diris: "Mi portos."

La patro ne kredis ankaŭ al ĝi kaj ĵetis ĝin en la maron. Kiam la maljuna korvo revenis en sian neston, li havis nur unu idon. Li prenis la lastan infanon kaj ekflugis kun ĝi super la maron. Kiam li sentis sin laca en la mezo de l' vojo, li demandis: "Ĉu vi nutros kaj portos min, kiam mi estos senforta de la maljuneco?" La korvido respondis: "Ne, mi ne portos."—"Kial?"—demandis la patro. "Kiam vi estos maljuna, kaj mi estos granda, mi havos mian propran neston kaj miajn proprajn korvidojn, mi nutros kaj portos miajn infanojn." La korvo pensis: "Ĝi diras la veron, mi penos por ĝi kaj transportos ĝin sur la kontinenton."

La maljuna korvo ne ellasis la korvidon, per lastaj fortoj svingis la flugilojn kaj alportis ĝin sur la teron, por ke ĝi konstruu neston kaj havu proprajn infanojn.

鳥 と 仔 鳥

鳥が島の上で自分の巣を造りました、そして小供達がもはや大きくなつた時に彼はそれらを大陸へ運びたいと思ひました。鳥は一匹の仔鳥を爪で捕まへて海の上へ飛び始めました。だが鳥は道の中程で既に疲れました、そして一層遅く翼を振り始めましたそして考へました：『今わしは強くつてこれは弱いのでわしはこれを海を越えて運んでやつてゐるが；併しこれが強くなつておとなになつてわしが年寄つて弱くなつた時これがわしの努力を思ひ出すだらうか。これがわしをあちらこちらと (de unu loko al alia loko 一方から他方へ) 運んでくれるだらうか』と。そこで鳥は仔鳥に尋ねました：『わしが弱つてお前が強くなればお前はわしを運んでくれるか。ほんこの事を云つてくれ』と。仔鳥はお父さんが自分を (gin=korvidon 仔鳥故男性にも女性にもせずして無性でしめたのである) 海へなげこむことをおそれましたそれで答へました：『私はお運び致します』と。併し年老いた鳥は息子のいふ事を信じませんでした、そして爪から小供を離しました。仔鳥は石の様に落ちてゐつて海で溺れてしまひました。年老いた鳥は一人ぼつちで島へかへつてきました。次に彼は海を越えて運ぶため第二番目の子をさらへました。再び鳥は途の中程で疲勞しましたそこで子供に『わしが弱くなつた時にはお前はわしをあちらこちらへつれてゐつてくれるか』と。子供はお父さんが自分を海へなげこむ事をおそれて『はい私はお運び致します』と云ひました。

親鳥は又この仔鳥を信じませんでしたそしてそれを海へなげこみました。老いた鳥が自分の巣へ歸つてきた時にはもはや唯一匹の仔があるだけでした。鳥は最後の子をさらへて海の上へ飛びました。途の中程で疲れをおぼえた時に彼は又尋ねました『わしが老年のため力もなくなつた時お前はわしを養ひ又運んでくれるか』と。仔鳥は答へました：『いゝえ、私はお運び致しません』と。『なぜだ』と親鳥が尋ねました。『あなたが老をめた時は私も大きくなつてゐて自分自身の巣をもつことでせうそして自分自身の仔鳥があることでせう、そして私は私自身の仔鳥を養つたり運んでやつたりするでせう。』親鳥は考へました：『こいつはほんこの事をいつてゐるのだ、わしもこいつのためにつくしてやろうそしてこれを大陸へつれていつてやろう』と。

年老いた鳥は仔鳥を離しはしませんでした、最後の力をだして翼を打ちましたそしてそれを地上へ運びました、——そこでその仔鳥が巣をつくり自分の子をもうけるために。

造語研究

上の文中にある單語の中で合成語をしらべてみませう。

(a) 接頭字のついたもの

flugi は飛ぶこと。故に ek'flugi はさび始む飛び出す意となる。

memori は記憶してゐること。故に re'memori は記憶にもどすこと即ち思ひだすこと記憶によびかへすこと。

juna, forta に正反對を示す mal がついたのは説明するまでもない。

(b) 接尾字のついたもの

korvo 鳥から korv'id'o (仔鳥)ができる。接尾字 -id- に oがついて ido は子を示す。

ungo 爪から ung'eg'o 大爪。

fari 「なす、作る」から far'igi 「なる」ができる。

laca から lac'ig'i ができる。

flugi から flug'ilo ができる。

(c) 準接頭字(前置詞等)のついたもの

porti から al'porti (……へ運ぶ) や trans'porti (……をこえて運ぶ) ができる forto に sen がついてそれが形容詞になつて

senforta (無氣力の) となる。lasi (そのまゝにおく) から el'lasi (……から出るまゝにほつてをく) ができる。

(d) 語根と語根

plen'aga

構文研究

(1) kiam~, …… ~の時……

(2) sur la kontinenton 目的格に注意。

(3) de unu loko al alia (loko) 一方から他方へ即ちあちこちへ。

(4) la korvo sola revenis は鳥が一人ぼつちで歸つたのであるから sola が形容詞委しくいへば la korvo revenis estante sola の意である。sole さいへば nur と大體同意義になつてしまふ。

(5) li sentis sin laca 直譯すれば「彼が自分自身の laca であることを感じた」で疲れを感じたことである。li sentis sin sola (自分の一人ぼつちであることを感じた) 等すべて同じ云ひ方。

(6) por ke…… (……せんがために) の ke 以下の文の動詞は普通命令形にする。

薔

薇

【R O Z O】

【ツルゲネフ散文詩より】

La lastaj tagoj de l' aŭgusto
Jam proksima estis aŭtuno.

La suno estis subiranta... Subita,
fortega pluvo sen tondro, sen fulmo,
ĵus estis transfluginta super vasta
ebenaĵo.

La ĝardeno antaŭ la domo fumis
kaj brulis, tute surversita de la fajrego
de la sunsubiro, de la pluvego....

Ŝi sidis ĉe la tablo en la salono kaj
obstine enpense rigardis la ĝardenon
tra la duonmalfermita pordo.

Mi sciis, kio pasis tiam en ŝia
animo. Mi sciis, ke post nelonga sed
turmenta lukto, ŝi en tiu momento
sin donis al la sento, kiu jam delonge
estis pli forta ol ŝi....

Subite ŝi levis sin, rapide eliris en
la ĝardenon kaj malaperis.

Forpasis horo... ankoraŭ unu...
ŝi ne revenis.

Tiam mi levis min, eliris el la
domo kaj laŭlonge de la aleo, en
kiu, mi ne dubis, iris ŝi.

Ĉio ĉirkaŭe mallumiĝis. Noktiĝis
.... Sed sur la malseka sablo de la
vojeto, hele ruĝiĝante en la mallumo,
videbliĝis ia ronda aĵeto.

Mi klinis min. Tio estis juna,
apenaŭ disvolviĝinta rozo. Antaŭ

秋も間近い八月の末。

太陽は沈みかけてゐた。雷鳴もなく稲妻も
ない烈しい俄雨が廣大な平地を通り過ぎた許
りであつた。

家の前の庭は落日の熱氣と驟雨とを一面に
浴びて蒸氣を發散し燃え立つてゐた。

彼女は客間の卓の傍に坐つて、半ば開かれ
た戸越しに庭をジツト物思ひに耽つて眺めて
ゐた。

其時彼女の心を過つてゐた事が何であるか
私は知つてゐた。私は彼女が其瞬間、ホンの
暫くではあつたが惱ましい煩悶をした擧句、
ズツ前からもう壓へ切れなくなつてゐた感
情に身を委れた事を知つてゐた。

突然彼女は立ち上つて足早に庭へ出て行つ
た、そして姿を消してしまつた。

一時間たつた、更に一時間、彼女は歸つて
來なかつた。

そこで私も立ち上つて家を出て、彼女が通
つて行つたに違ひない並木路に沿つて歩い
た。

あたりは全く暗闇になつた。夜が來た。其
時私は並木路の濕つた砂の上に、小さな丸い
物が闇の中に鮮かな赤色を見せてゐるのを見
さめた。

私は腰を屈めた。それは水々しい、やつと
開いた許りの薔薇の花であつた。二時間前に

【註】 此エス譯は Alexandra Mexin 氏に
依るものであるが、譯文中二三の省略箇所は
全部これを補ひ、必要上二三の訂正をしたこ
こをおこさわりしておく。 trans'flugi ~ flugi
trans 彼方へ飛び去る。 La hirundo transflugis
la riveron 燕は河を越えへ彼方へ飛んでいつ
た。 fumis kaj brulis は雨後の庭が入日を受
けて盛に水蒸氣を發してゐる有様を云つたも
の。 sur'vers'it'a de 上に浴びせかけられて。
enpense ~ medite 考へ込んで。 du'on'mal-

ferm'it'a 半ば開けられた。 lukti の元來の意
味は相撲する。競ふ。こゝでは彼女が心中去
就に迷つてゐるを云ふ意味であるから煩悶と
譯しておいた。 la sento, kiu estis pli forta ol
ŝi. 彼女よりも一層強かつた感じ。は直譯で
意譯すれば la sento, kiun ŝi jam delonge ne
povis subpremi. ankoraŭ unu ankoraŭ
unu horo forpasis. 更にもう一時間経過した。
laŭ'longe deに沿つて。 Laŭlonge li trairis
la straton preskaŭ la tutan, kiam eklumis la

du horoj mi vidis tiun ĉi rozon sur ŝia brusto.

Mi zorge levis ĝin, kaj, reveninte en la salonon, mi kuŝigis ĝin sur la tablon, antaŭ ŝia seĝego.

Kaj nun finfine ŝi revenis kaj kun facilaj paŝoj, trairante la tutan ĉambron, sidis ĉe la tablo.

Ŝia vizaĝo estis pala kaj samtempe pliviviga. Rapide, kun gaja konfuzo ĉirkaŭen rigardis ŝiaj mallevitaj, kvazaŭ malgrandiĝintaj okuloj.

Ŝi ekvidis la rozon, ekprenis ĝin, rigardis ĝiajn ĉifonitajn, malpurigitajn florfolietojn, rigardis min — kaj ŝiaj okuloj, subite haltintaj, ekbrilis pro larmoj.

“Pro kio vi ploras?” demandis mi.

“Pri ĉi tiu rozo Rigardu kia ĝi iĝis”

Mi ekvolis esprimi saĝecon.

“Viaj larmoj forlavis la malpuron,” mi diris kun signifplena esprimo

“Larmoj ne lavas, larmoj bruligas,” ŝi respondis kaj, sin turninte al la kameno, ĵetis la floron en la mortantan flamon.

“La fajlo bruligos pli bone ... ol larmoj,” ŝi ekkriis fiere — kaj ŝiaj okuloj, ankoraŭ brilantaj de larmoj, ekridis provokante kaj feliĉe.

Mi komprenis, ke ŝi ankaŭ estas ekbruligita. (I. S. TURGENEV)

私は此薔薇を彼女の胸の上に見たのである。

私は注意深くそれを取りあげた。そして客間へ戻つて来るさ、それを彼女の大きな椅子の前にある卓の上に置いた。

さうさう彼女も歸つて來た。そして軽い歩調で部屋中歩きながら卓の側に腰を下した。

彼女の顔は蒼ざめていたが、同時に一層活氣付いてゐた。彼女のうつ向けたまるで小さくでもなつた様な眼は、明るい困惑の色を湛へて、彼方此方をす疾く眺めてゐた。

彼女は薔薇に氣付くさそれを取り上げ、ポロポロになつて、穢れた花瓣を打眺めてゐたが、私の方にその眼を轉じた。俄かにジツト動かなくなつた彼女の眼は涙で輝いてゐた。

何を貴女は泣いてゐるのです。と私は尋ねた。

『此薔薇の事でございます。これ御覽なさい、こんなになつて終ひましたもの』

私は機轉をきかせて見ようと思つた。

『貴女の涙は此汚穢を洗ひ落して呉れるでせうよ』と私は意味あり氣な表情を浮べて言つた。

『涙は洗ひ落して呉れはしません。只焼いてしまふばかりです』と彼女は答へて、爐の方へ身を轉じ、消えかゝつた焔の中へ花を投げ入れた。

『火の方がもつとよく焼いて呉れます、……涙よりか』彼女は誇らし氣に言つたが、彼女の未だ涙に輝いてゐる眼は傲慢に幸福さうに笑つてゐた。

私は彼女も亦焼かれた事を知つた。

(ツルゲネフ作)

luno. [Fab. de Andersen. Zam.] 月が照り始めた頃彼は街路傳ひに死んだその端までも來てゐた。laŭlonge de に對して laŭlarĝe de は横に沿つて。Laŭlarĝe de la herbejo tiriĝis larĝa kanalo aŭ rivereto. [同]。mi ne dubis は副詞句、sendube と云ふに同じ。hele ruĝiĝante en la mallumo. 暗闇の中に輝かしく赤色を見せて。vid'ebli'ĝis ~ fariĝis videbla. juna は他の譯書に依るさ freŝa となつてゐるから、その意味での juna に解する方がいゝ。

dis'volvi'ĝi 展開する。(卷物等を)ほごく。より轉じてこゝでは花がほころびる。pli'viv'ig'a 一層いきいきした。ĉifon'itajo ポロポロになつた。flor'foli'et'o 花瓣。sin turni al 體の方向を轉ずる。又、……にたよる、頼む、の意に用ふる事もある。例へば mi sentas la deziron faciligi la koron per ia preĝo, turni min al iu plej alta forto ktp. (El parolado de Zam.) の如き場合。esprimi saĝecon 伶俐さを表す。provokante 挑んで、人を激撥して。

科學の 에스 語

Arkeologio 【考古學】

川崎直一

Ni dubas, ĉu arkeologio estas scienco en la plej preciza senco de la vorto.

Provizore ni donu jenan difinon:

„Arkeologio estas la scienco, kiu studas pasintecon de homaro per ĝiaj materiaj restaĵoj.“

Kun filologia metodo tiu ĉi arkeologia metodo estas du studmetodoj de kulturscienco.

Kiel tia scienco naskiĝis?

Deonna, fama svisa arkeologo, klarigas:

„Scivolemo je kuriozaĵoj, kiu kaskiĝas en la fundo de homa koro, estas origino de sciencaj studoj. Homaro, kiu marŝis antaŭen, samtempe ne forgesis rigardi malantaŭen. Eĉ en la plej primitiva epoko ĝi ne nur interesiĝis je estantaj kaj estontaj nepre necesaj aferoj, sed ankaŭ ne malsatis esplori estintajn kaj nepraktikajn aferojn. Krom tio la neceso konservi religiajn ritojn kaj tradiciojn ĝin devigis studi pasintaĵon. Tiamaniere, ekĝermis arkeologio jam en la antikva tempo.“

Ĉar arkeologio estas rigardata pli-prefere scienca studmetodo traktanta materiajn materialojn ol scienco havanta unu difinitan enhavon, tiu ĉi metodo povas aplikiĝi je diversaj flankoj. Belartistoj per tiu ĉi studustilon de belartaĵo, religiistoj disvolvigon de rito, sociologoj, historiistoj kaj aliaj specialistoj ankaŭ utiligu tiun ĉi arkeologian metodon al siaj specialaj materialoj.

考古學が語の最も嚴密な意味に於て科學であるかどうか我々は疑っている。

假に次のように定義を與えよう。

「考古學は物質的遺物によつて人類の過去を研究する學である」。

この考古學的方法は文献學的方法と共に文化科學の二つの研究方法である。

いかにしてこんな科學が生まれたか? 有名なスイスの考古學者ドオンナは説明する—

「人間の心の奥にひそんでいる好奇心が學術的研究の起源である。前へ前へと進んだ人類は同時に後を見る事を忘れなかつた。最も原始的な時代に於ても現在及將來の非常に必要な事に興味を感じたのみならず、又過去及び非實用的の事を探るのを嫌わしなかつた。その上宗教的儀式及び傳説を保存する必要が人類をして過去を研究せしめた。このようにして、考古學はすでに古代に於て芽を出したのであつた」。

考古學は一つのまとまつた内容をもつた科學さうよりは物質的資料を取扱う科學的研究方法さうすべきであるから、この方法は種々の方面に應用できる。美術史家はこれによつて美術様式、宗教學者は儀式の變遷を研究すべく、社會學者、歴史家その他の専門家も亦各自の専門資料にこの考古學的方法を利用すべきである。

手紙のエス語

[Invitoj]

【招待文】

Kara amiko!

Postmorgaŭ mi havos la plezuron, festi mian naskiĝtagon, kaj mi ĝojus, se vi volus partopreni en malgranda societo. Vi renkontos ĉe mi multajn el viaj amikoj kaj aliajn tre agrablajn personojn. Ni tagmanĝos je la tria horo, sed mi petas vin veni kiel eble plej frue, jam je la dua, ĉar se la vetero estos favora, ni eble povos pasigi iom da tempo antaŭ la manĝo en la ĝardeno. Mi esperas, ke vi estos libera postmorgaŭ kaj respondos favore al

via sincera amiko

.....

~~~~~[respondo]~~~~~

Kara amiko!

Mi estas tre dankema al vi pro via afabla invito, kiun mi ricevis antaŭ momento, kaj mi rapidas respondi al vi, ke nenio povus malhelpi min partopreni en la postmorgaŭa soleno. Tute certe mi estos ĉe vi je la difinita horo.

Cetere, en ĉiu okazo mi permesas al mi, postmorgaŭ deziri al vi feliĉon kaj sukceson.

Volu esprimi al viaj gepatroj mian respekton kaj akceptu koran saluton de

via sincera amiko

.....

拜 啓

明後日は私の誕生日に當りますから祝ひをしたいと存じます, つきましてはもし貴兄も此小さな會合に御加り下さるならば幸甚の至でございます。当日は貴兄の御友人や氣のあふ人も大勢參ります。三時に食事をしたいと存じますができるだけ早く二時頃までには御來駕下さい。若し天氣がよければ食事の前に少し庭園で遊びたいと思ひますので。明後日は御暇で御出席の御返事を頂きたく祈る次第でございます。

敬 具

.....より

~~~~~[同 返 事]~~~~~

拜 復

只今は御親切にも御招待下さいまして有難う御禮申上ます, 別にこれと申して用事もございませんから明後日の御祝に參上仕ります右取急ぎ御返事迄。きつと御指定の時刻に參上致します。

尙又明後日の御盛會を祈ります。(mi permasas al mi ke ... = 敢て……す, おこがましくも……す)

御兩親様へもよろしく御傳言下さいませ。私の心からの挨拶さおうけ下さい。

敬 具

.....より

[el Unua legolibro de D-ro Kabe]

單語研究雜話

1 9 1

川崎直一

36. komentario.

1923年の *Tra la Literaturo* に *La Rabistoj* の komentario が連載されている。例をあげるに IV. 1. *Iru antaŭe*. Rabisto Moor sendas sian amikon en la kastelon de sia patro, por al li raportu pri la filo. Iru antaŭe, ne antaŭen. Kompreneble li iras samtempe antaŭen, sed Moor volas esprimi, ke lia amiko Kosinsky iru la unua, li mem, Moor, sekvas lin kiel la dua.

も一つ III. 1. *Francisko ne fleksas sin antaŭ vi kiel kolombumanta Celadono*. Tre interesa la esprimo „kolombumi“ por la germana vorto „girren“. Kolomboj havas la kutimon, amindumante kolombinojn, sin klinadi kaj aŭdigi al ili strangajn, vibrantajn sonojn. Tiun ĉi faradon la germana lingvo nomas „girren“, kaj Z. tre trafe uzas por ĝi la vorton „kolombumi“.

37. heĝo.

イギリス人は特によく此の言葉を使う, Barilo なんかでは, さても 生垣 の感じが出ないからであろう。

38 onanismo.

舊譯聖書創世記 38:

.... Kaj Jehuda vidis tie filinon de iu Kanaanido, nomata Ŝua, kaj li prenis ŝin kaj envenis al ŝi. Kaj ŝi gravediĝis kaj naskis filon; kaj li donis al li la nomon Er. Kaj ŝi denove gravediĝis kaj naskis filon, kaj ŝi donis al li la nomon Onan..... Kaj Jehuda prenis edzinon por sia unuenaskito Er, Sed Er, la unuenaskito de Jehuda, estis malbona antaŭ la okuloj de la Eternulo, kaj la Eternulo lin mortigis. Tiam Jehuda diris al Onan: Envenu al la edzino de via frato, kaj boedziĝu kun ŝi kaj naskigu idaron al via frato. Sed Onan sciis, ke ne por li estos la idaro, tial, *envenante al la edzino de sia frato, li elverŝadis la semon sur la teron, por ne doni idaron al sia frato*. Kaj malplaĉis al la Eternulo tio, kion li faris, kaj Li mortigis antaŭ lin

39. lakta vojo.

ギリシヤ神話.

Perseo がしばられた王女 Andromedo を救わんと息せき切つてかけつけた。その時彼

の走つた路に起つたほこりが「乳の路」即ち銀河である。

Paniko (恐慌), erotiko (戀歌) 共にギリシヤの神 Pano, Eroso から出た。神々の性質があらわれています。

40. filologo.

Pri lingvoj studojn faras
La moŝto profesora
Dum lian filon logas
Knabino facilmora,

Kaj malgraŭ diversenco
Ne estas diferenco!

(En ambaŭ okazoj estas
.... “Filologo”!)

これは Raymond Schwartz, *Verdkata Testamento* の見本ですが、次の演説をなされた鹽谷榮先生にこれを謹んで捧げます。

「言葉は生物である。生きたる言葉と云ふのは是は自然に出来た言葉で決して人が作りだしたものぢやない。人工的に出来た言葉はないことはない。あの Esperanto 世界語と云ふものは人が拵へた。併し Esperanto には命がない。Esperanto は一時的のものだ。あれがどれ程人の要求を満足させませうか、極く當り前の一通りのことのほかあれで言ひ表はせない。世界の各國人に通じて便利で宜いと云ふ言葉が流行になれば我々も英語などやらずにそれをやる方が宜いのであります。けれども悲いかな人間の造つたものである。規則に依つて支配させやうとしてある。Esperanto は規則を無視して出来るものでない。Esperanto で皮肉を云つたり、おどけを云つたりすることが出来るものでない。(英語研究苦心談 p. 124).

おこさわり

7月號に Saussure に dediĉi した論文を書きましたが、石黒さんから S. は數年前に死んだと御注意がありました。實を申しますと、あの論文は 一日本語でしかも漢字まじりの一 單に S. のみでなく、我々日本人の心の隅にもやゝもすればひそんでいる reformemo を目標としたのです。で S. の死それ自身は私のあの論文の趣意を全然だめにするものではありませんが、こんな重大な事實を知らなかつた私の愚かさを恥じ、あわせて石黒さんの御好意にあつくお禮を申します。

Ido 語に分裂崩壊の兆?

矢野圭一

國際語の必要は各方面に渡つて痛切に感ぜられて來たが、この當面の問題を解決すべく考案された國際語は勿論エスペラントの外に數多存在する。然し、エスペラント以外の國際語の勢力はまことに微々たるものであつてそれ等を皆合せてもエスペラントの1%にも及ばない。然し彼等は詐欺、陰謀的手段を用ひエスペラントを攻撃することを事とし、國際語それ自身の發達を *kompromiti* せんとしてゐる。現今のエスペラントの勢力を以てすれば之等の妨害は所謂蟻螂の斧にすぎず敢て意に介するにたらないが然し我々エスペランチストとして多少とも他の *projekto* についてしられなければならないと思ふからこの中でも最も有力だと思はれてゐる Ido は現在どんな状態にあるかを御紹介して諸君の御参考に供することとする。

御承知の如く(詳しくは本誌第五卷に連載の小坂氏の論文をみられよ)1907年佛國におけるエス運動の總指揮官格の L. de Beaufront が Conturat, Leau の兩策士に擁せられて日頃の野心を遂行すべく突如エスペラントの一部を變改して(結局エス語とフランス語をつきまぜた様な變なものになつた)“Ido”の名の下に反旗を翻へしてエスペラントの牙城にせめよせ一時エスペラント運動に一抹の暗雲をたゞよはし國際語運動の前途を危ましめた。然し神は正義の味方であつた。二十年の辛酸を経て築きあげられたエスペラントは微動だもしなかつた。かくて今日の隆昌をむかへたのである。然し Idistoj 達の宣傳は時に辛辣を極め「三百十の團體と千二百五十名の選定委員會によつて考究完成された國際語」といふふれだして世間を詐つて Esperanto の論難攻撃のみを事としてゐるのでこの巧妙な口車にのつて今もつて“Ido”は Esperanto よりも數倍優つたものと早のみこみして最近出現したるんな國際語の事は一向しらずして Ido が最新最上のものと誤信して Ido も Esperanto も一向知らないでしつたかぶりして Ido の肩をもつてよるこんでゐる新しがり屋が日本にも數人はゐる様である。こういった手合ひの口車にのらない様に我々エスペランチストは Ido 其他の國際語の事は一通し心得ておく方がよいと思ふ。Ido 語がいかにも最負目にみても Esperanto よりも難解であり非論理的であることは本誌第五卷に連載した小坂氏の論文を御覽になればよいと思ふ。

こゝでは言語の優劣はのべないたゞ氣息奄々たる Ido の近状を一寸御紹介しようと思ふ。

★Idisto の Kongreso (Internaciona Kongreso por la Linguo Internaciona Ido) は第一回を1914年 Luxemburg で開く筈の所大戰勃發のため中止した。それで第一回は Wien (1921)で開かれ、その後順次 Dessau (1922), Cassel (1923), Luxemburg (1924), Torino (1925), Praha (1926)で開かれた。今年は Kongreso はなく、West-European Ido-Konfero が Paris で、Mez-European Ido-Konfero が Szombathely (ハンガリー)で開かれた。來年は Zürich で Kongreso がある豫定である。これらの Kongreso はエスペラントのそれに比較して参加者の數が甚だしくエスペラント大會が一千名乃至五六千名の参加者あるのに比して甚だ僅少で例へば昨年の Praha 大會には約100名の出席者あり、12ヶ國が代表されたと稱してゐるが、„Heroldo de Esperanto“のトップ抜きによれば傍聴に行つた Praha その他の Esperantistoj、及び何も知らないお客さまが共に参加者と記録されてゐるので、實際の Idistoj は30名以下であつたこの事。これではエスペラントの地方會の會合にも及ばないみじめな有様である。

★Patro di Ido と呼ばれる L. de Beaufront は Ido-Akademio の sekretario として今尚策動してゐるが、昨年相ついで Ch. Lemaire 及び Fr. Schneeberger 等の有力な同志が死んだので「僅かの間に多くの同志が吾々から消えて了つた。彼等の名を茲に記してゐる自分すらも明日は彼等の仲間入をするのであらう」と心細いことを述懐してゐるのを見るに、寄る年波と共に、(彼は1755年生れて本年72歳)多くの元老に先立たれて寂しさを感じてゐるもの如くである。

★Ido が反旗を翻してから多少共に同志を獲たのは發表以來改造に次に改造を以てしたのでエスペランチスト中でも所謂改造好きの連中が Esperanto を去つて Ido の方へ行つたからである。(お蔭で Esperanto の危険人物がみな出ていつたといふわけになる。)所が毎月毎年改造されるのでは宣傳する方ではたまつたものではない。(講習を開く毎に改造された點をなほしていかなければならない教科書だつて *teksto* を變更せねばならないから)。そこでさうさう1913年に改造を一時中止して専ら宣傳に努めることになつた。この中止が

1929年11月末日（此の安定期を *periodo di stabileso* と呼ぶ）迄きめてあつたが昨年 Ido の巨頭連の Genève 會議で此の時期を繰上げることに決議しついで行はれた Idistaro の一般投票の結果明年即（1928年4月1日を以てこの *periodo* の終了すべきこと、及び改造の議論（*diskuto pri ŝanĝoj*）はその二年前から開始することを Akademio が決定した。

何が故に Idistoj 達は普及上の障害となる改造を急いでゐるかには雄辯に Ido 運動の行きつまりを物語るもので此際心氣一轉策として人氣取りに「改造」を看板にして併せて自分自身の改造癖を満足させようといふのである。

★それで昨年春から盛んに改造案が提出されて Ido の論壇を賑はしてゐる。何しろ、議論好きの改造癖連の集まりのことだから甲論乙駁その盡きるどころを知らず、この勢に感ずる所あつてか、Akademio から「爾今 Ido 改造の件に關しては先づ實際の経験がその變更を要求することを確めたる後に議論相成るべきこと」この達示が出た。

稀には具眼の士もあつて Ido をフランス語との關係が密接にすぎるのを訴へてゐる。最近の提案中、次の如きものがある。曰く、*q, w, x, y* は不用なれば除去せよ。三人稱の代名詞は *lu*（すべての性に共通）、*li*（前者に對する複數）を主とすべく他の *il, ili; el, eli; ol, oli* は隨意とすべし。數の呼び方はエスペラント流に則ること。*cienco*（エス語の *scienco*）、*ceno*（エス語の *sceno*）は *internacieco* に反するから、すべからくエスペラントに倣ふべし、等々。Ido がエスより進歩した點だと嘗て自慢した諸點を捨てよと云ふのである。

又1924年の大會で公式のものと認められた Ido の名稱とその *insigno*（青の *fundo* に白の *seŝpinta stelo*）を改めよと云ふものもある。従來の *insigno* は *cionisto*（= *zionisto*）の *insigno* に類似してゐるからイヤだと云ふのがその理由である。

★今春の Ido-Akademio の改選は合法的に行はれなかつたと云ふので、雑誌“Mondo”ではフンガイしてかゝる不合理に對しては援助出來ぬとイキマイテゐる。（Idisto 特有の陰謀的手段があらはれてゐるのに注意あれ）。一體この“Mondo”なる雑誌は昨年未までは Ido-Akademio の *oficiala organo* であつたが、今年からは「*mondo-lingvo* の宣傳、自由討議及完成に捧げられた *sendependa revuo*」と自稱しただけあつて進取的の傾向を有してゐる。これと對立するものは“Ido”と云ふ雑誌で保守的色彩が多い。（この雑誌の言語

欄は Beaufront が擔當してゐることは注目に値する）。同誌の2月號に「今まで提出された案のうちで考慮すべきものは殆どない。これは吾々の言語が十分完成されてゐる故最早改造の餘地がないからである。かの Eliziano（省略）の説（*Esas, domo* を *es, dom* と略する如き）は Ido の理論に反するものである。吾々は所謂改造家をおそれる」と云つてゐるのはその保守派の代表的意見であらう。

かくて Idistoj 中にも保守派と改造派の兩派が相對立してあらはれてきたのであるから來年四月以後改造問題でこの兩派間の論争がどう轉廻するかは見ものである。おそらくはこの兩派の間に大きな溝ができて幾つにも分裂して崩壊してゆくのではなからうか。嘗つてエスペラントの出現前 Volapük（1880年發表）が國際語として世人によつて謳歌され1889年巴里に第三回萬國大會を花々しく開催することができたにも拘らず Volapük 學士院が Volapük 改造といふ邪道に足をふみこんで發案者にして保守派たる Schleyer と相對峙して抗爭するに至つたため遂に1899年全く四分五裂土崩瓦解してしまつたのと同じ經路をたどるのではなからうか。

Ido が Esperanto から離れて獨立の旗を翻したのは Esp. よりも一層現代歐洲語に近いものをつくりあげたいからであつた（それだけ Ido は非論理的になり東洋人その他の非歐洲人にとつて難澁のものである）。しかるに1922年 Edgar de Wahl によつて發表された新國際語 Occidental（勿論獨習書一冊もないが）は Ido よりも遙かに現代歐洲語に近い（歐洲だけの共通語を標榜するが故に）。其故嘗つては現代歐洲語に近いことを誇りとした Ido もお株を奪はれた貌である。來年の改造期が來て改造、保守兩派の抗爭によつて Ido はより Occidental へ近づくかより Esperanto に近づくかみものであるがどちらに近づいても Ido それ自身としての存在の理由は益々薄弱になるにすぎない。

この Ido の悩みをよそにして此二三年間に發表された國際語新案は Welt'pitshn, Esperido, Arulo, Meso, Qosmian, Cosman, …等多々ある。大抵 Esp. や Ido の變形にすぎないがこれこそは妙案ぞと鼻うごめかす國際語製造家の自惚加減こそ笑止の至である。實に濱の眞砂はつきるさも國際語製造屋の数はつきないかにみえる。

エスペランチストよ。我々はこの tumulteto を遙かの下界に見下して我々の celo に向つて歩まうではないか。〔本論文の材料を提供された近藤君の好意を深謝す〕。

新刊紹介

【BIBLIOGRAFIO】

堀 眞 道

★TRI FONTOJ KAJ TRI KONSISTPARTOJ DE MARKSISMO, de N. Lenin, esp. teksto kun jap. traduko kaj komentario de I. Isozaki, 19×28 cm., (miriagrafe pres.) p. 40, prez. ¥ 0.30, eld. de Junula Ligo E-ta, aĉetebla ĉe S. Higa, 433 Jodobaŝi-Kasiŭagi apud Tokio, Japanujo, 1927.

磯崎巖君が譯註を附してエスペラント青年同盟より發行せられたものでレーニン著の「マルクス主義の三源泉」——唯物論的辨證法、剩餘價值説、社會主義——の概説である。此方面の文献に乏しい斯界に一大光明を投じたもので我國プロカルの進路に大なる意義をなすものであらう。但しエス譯の本文は所々に妙な——或ひは Sennacieca Revuo 式な——部分が見へる。殊に ek と em の接頭接尾辭を濫用してあるのが眼ざはりである。磯崎君が相當に本文に筆を加へられてもよかつたと思ふ。然しこのエス譯文をこれだけこなして譯註せられた同君の努力には感服する。さまれ同志諸君に是非お薦めして共に若き新人同盟の將來を祝福したい。(謄寫版、申込所東京市外淀橋町柏木 433 比嘉春潮氏宛、振替口座東京 35659 番)。

★KONGRESLIBRO, 13×19 cm., p. 25, eld. de Kataluna E-ta Federacio, Soller, Mallorca Hispanujo, 1927.

西班牙カタルナの遍歴の都と稱せられるソレルで催された第十四回大會の kongreslibro である。美しい十數枚の寫眞と案内記を載せて會員名簿を附してある立派なもの。

★LA KAPITANFILINO, de A. S. Puŝkin el la rusa trad. M. Sidlovskaja, 11×17 cm., p. 172, prez. 1.50 rm., eld. de Rudolf Mosse, Berlin, Germanujo, 1927. (Noj 15-17 de la Bibliografio Tutmonda.)

モツセの世界叢書(詳細は本誌第七年 23 頁参照)の第十五——十七編でプーシキンの小説の譯。寫實の妙を以て知られるプーシキンが軍隊生活を描寫した代表作でトルストイも之を「彼の作品の絶頂」にあるものと推賞したといはれて居る。退職陸軍少佐の家庭に生れた若き青年の主人公は修業のため僻地オレンブルグの聯隊に送られ更にベルゴロダの城砦の守備隊にやられる。そこで隊長大尉の娘と戀に陥つたが折から土匪の襲撃に遇ひ砦は陷落して將校は鑒になつたがその首領に以前恩

恵を與へたことがあつたので命からがらオレンブルグの城に逃げ戻つたが戀人の急を聞き脱走してその難を救ふ。しかし反逆罪に問はれて獄に下るのを戀人「大尉の娘」が身を挺して女帝に訴へ冤罪が晴れて目出度結婚といふ筋。若き青年士官の純な氣持とウラル、キルギス地方の風土を良く描寫してある。譯文は非常に結構で殊に露語獨特の言葉の綾を巧みにエス譯して丁寧な註が附してあるのは喜ばしい。此叢書も編を追つて立派になつて行く。是非諸君の御購讀を御薦めします。

★ESPERANTO-SCHLÜSSEL, 8×11 cm., p. 32, prez. 0.10 rm. (10 ekz. 0.30 rm., 100 ekz. 8 rm.,) eld. Germana E-to, Berlin S. W, 61, Wilmsstr. 5, Germanujo, 1927.

「エスペラントの鍵」の獨語で作られたもので最後に商業語——E. A. の専門語辭典編纂係採用のもの——を附したところが新機軸であらう。

★ENKONDUKILO, 9×13 cm., p. 24, prez. por 2 ekz. 1 resp.—kup. 10 ekz. 4 r. k. 50 ekz. 16 r. k., eld. de E-to Junularo, S. Neupert, Wedellstr. 17, Leipzig N. 23 Germanujo 1927.

初學者の爲めに基礎文法の手引として作られたものの半面白紙で書入れに便である。

★FESTSCHRIFT DES 16. DEUTSCHEN E-TO KONGRESS, 15×22 cm., p. 138 prez. 2 rm., eld. E-to-Verlag Ellersiek & Borel G. m. b. H., Berlin, Germanujo, 1927.

“Esperanto ein Kulturfaktor” 叢書(「文化の要諦エスペラント」叢書)の第七編で第十六回獨逸エス大會の記念出版物、エス語講習の報告、エス語と商業學校、講習生の最初の通信文、エス語通信教授エス語速記術、エス語教授法等の報告及研究の發表で大部分獨語で書かれてある。最後に獨逸に於ける普及機關の狀況を載せてある。如何にも組織的な獨逸人らしい書物である。

★ESPERANTO-HANDELSKORRESPONDENZ, de D-ro Emil Pfeffer, 12×19 cm., p. 96, prez. 0.50 mk., eld. de Stegrermühl-Verlag, Wien 1, Wollzeile 20, Aŭstrujo, 1927.

Tagblatt-Bibliothek の第 500-501 編で緒論に世界商業とエス語を説き商業文を一般的のものより廣告文より證書類迄細大漏れなく掲げてエス獨對譯になつて居る。我々には寧ろ獨商業文の練習用としても便利であらう。

★DU JUNAJ FRAŬLINOJ KAJ KORNELIINO, (du noveloj el la bonekzemplaj) de Miĥaelo de Cervantes, trad. de Julio Mangada Rosenörn, 14×20 cm., p. 70, prez. 1,75 fr. sv. (tri respondokuponoj), eld. Glorieta de Bibao, 5, Madrid, Hispanujo, 1927.

Hispana E-to Biblioteko の一つで西班牙文豪で「ドンキホーテ」著者として世界的に有名なセルバンテスの短篇二つの翻譯で譯者は同地の我運動の中心人物である。筋は相當に面白いが冒頭にも斷つてある通り原文に忠實に過ぎて多少難澁なところがないでもない。

★PLENA JAPAN-ESPERANTA VORTARO. komp. de T. Chif; eld. de Nippon Esperanto Kĵokūai, 7 Niŝi-imagaua-ĉo, Kanda, Tokio; 7 cm×14 cm p. 1700, prez. ¥ 5.00. (大成和エス辭典——東京市神田區西今川町七 日本エスペラント社發行).

Grandega vortaro japana-esperanta, kompilita de malnova samideano, pioniro, S-ro T. Chif, kies eldonigon longe atendis japanaj esp-istoj. Ni ne bezonas multe priparoli pri la valoro de tiu ĉi verko, ĉar ĝin garantias la nomo de Ĥ kompilinto.

千布氏が數年の歳月を閑して努力された大成和エス辭典が最近こゝに完成されて出たことは我が邦エス界にまつて大きな慶びであらねばならない。その譯語その他についても我々の期待を裏ざらぬ立派なものであることは著者の名が雄辯に物語つてゐる。唯印刷紙がやゝ薄すぎるため裏側の印刷がすけてみえるのは遺憾である。同書中三々九度、振假名、板前、居續、卷紙、抹茶、飯焚、晦、水垢離、不見轉、剝身、婿入す、睦言、五月雨、内儀、名主、人情本、忍術、大關、ぼつと出、落款、落語……等の日本特有の語彙の譯語は日本人にまつては無くともよく又なくもがな(初學者が誤解するため)と思はれる。尙一二氣付たものはnetoを「正味」の意味に使ふのはよくない(Oficiala Klasika Libroによれば)かと思ふ。(一千部限特價4圓の由。尙本年内に上卷所持者は上卷に1圓20錢そへておくれれば合本をくれる由。)

★LA VERO PRI SUDA TIROLO, de Hans Fingler, eldonejo: Ellersiek, Berlin S.W. 61. prez. 1 mk., p. 50, 14 cm×20 cm.

1926年2月初め、伊國首相 Mussolini 氏は南チロールに於けるドイツ人は所謂少數民族と稱すべきに非ず、彼等は人種的敗殘者にして、その數18萬。此の内8萬人はイタリヤ人

の孫にして、正に吾人の同胞であると演説した。しかし、此の地は平和條約を以つて奥國より、イタリヤに讓渡せられたもの。同地居住のドイツ人は現フアシスタ政府のドイツ人イタリヤ化、否イタリヤのチロール領有に不満の叫びを擧げてゐる。本書は1918—1926に至る此の間の事情を反伊論者が簡潔に記したもののEsp.譯である。國際政局に興味を有する人々の一讀を薦む。菊判50頁。定價4ドイツ・マルク。(此項 S. Aibara)

★エスペラント講座(名古屋市中區音羽町四番地エスペラント語研究社發行)。

之は去る6月會員を募集されて發行されたエス語講義録で6ヶ月完了で毎週教材を配布されるのです。毎週配布するのはよい思ひ付と思ふ。會費は全額一圓(外に送料25錢)です。(分納可)毎週配布されるものは菊判に6號活字二段組のもので大抵本文6頁表紙四頁(表紙にも記事等あり)です。今迄十號迄發行。今迄の内容は小坂氏の「エスペラント捷徑」などを大いに利用されてそれにEkzercaroの文例を入れ詳しく説明されたものであるから申分がない。講義録で獨勉したいさい方におすゝめしたい。

[daŭrigo de p. 282]

Parizo ĉe la vendreda kunsido ĉe Sorbonne pri la stato de Japanujo kaj la verda movado en nia lando. Post Ĉita en ĉiu urbo troviĝas rapidege parolpovaj kompetentaj Esperantistoj. Mi hontegas pri mia kapableco. Mi klopodas lernigi mian edzinon, sed ŝia kapo estas tro malproksima por eklerni iun fremdan lingvon; sekve ŝia progreso en Esperanto estas tre malrapida. Se mi nur Esperante parolus, ŝi fine malgajiĝus. S-ro Essigman, Del. de UEA en Varsovio, estas tre afabla maljunulo. Ni salutis antaŭ la tombo de nia Majstro kaj ĉirkaŭ ĝi ensemis semojn kunportitajn. Tamen ĉirkaŭaĵo de la tombo estas tiel malvasta, ke mi tre timas ke nenio kreskiĝos. Ni havis la honoron viziti la domon de idoj de nia Majstro, kie li pasigis sian lastan vivon.

Bonvole prelegu miajn leterojn al samideanoj ĉe la kunsido. Mi ne havas tempon skribi al ĉiuj amikoj aparte. Ĉi-kune mi enmetas kelkajn fotografiaĵojn signifoplenajn. Kun mil salutoj. Via H. Asada!

和文エス譯添削欄

編輯部

よく作文の添削をしてくれないかといつて申越される方がございますが、何分手不足ですの
で到底御希望に應じきれません。それでその一助にと思つて、大して編輯部の負擔にならない
やうなやり方で、次の様な作文添削を始めたいと思ひます。

1. 毎月一定の課題を本誌上で發表してそれに對する答案を募ること。
2. 毎月の本誌上へ前々號の課題の答案を掲載致します。
3. 尙答案を送られる時特に返信切手三錢を添へられた方に限り答案を赤インクで添削し
て、其課題に對する模範答案を掲載した雑誌の着く頃お手許へ返送致します。（添削
を希望の方は洋罫紙の片面へ一行置きに答案をかく事。）
4. 御希望の向に限り點數を附してお歸へしします。
5. 模範答案に採用掲載した分に對しては誌上に明記します。

尙昨年夏頃迄懸賞作文としてをりましたが、應募される方が大體きまつてゐていつも賞品を
きめるのに困つたし、又僅か十數個の單文を作つた方に賞をだして他の澤山の原稿をかいて下
さる人に謝禮しないのは不公平のきらひがあるので、懸賞をすることはやめました。どうかま
じめに自分の腕をのれろうといふ方が應募下さい。

★日本語にさらはれずに
DEVIZO: ★自由に
★すつきりしたエス文に

..... 課題 第一

(締切九月末日 發表十一月號)

1. 己れを知るは難し。
2. 自働車が川の中へすべりこんだ。
3. 今日は寒い日だつた。
4. 彼は大變腹を立て、彼女に手をかけまし
た。
5. 何か黒いものが地面に横はつてゐる。
6. 都合出來次第返金の事。
7. 僕の知つてゐる所では彼は優しい男だ。
8. 彼は酒ものまれば煙草ものまない。
9. 蠅が天井にさまつてゐる。
10. 山賊達は爐をこりまいて坐つてゐた。
11. 彼は村中で一番の物持です。
12. 夫婦はお互に助けあはねばならない。
13. 彼が何時來ようとも仕度が出来てゐま
す。
14. 閣下、どうぞおゆるし下さい。
15. 政界の新人鶴見氏の作一大理想小説。

..... 課題 第二

(締切十月末日 發表十二月號)

1. 彼は金を盗んだだけならまだしも人殺し
さへやつたのだ。
2. 彼に比べて私は彼女を餘計に愛してゐる
つもりだ。
3. 出あひ頭に口論をおつ始めた。
4. 一本（酒を徳利に一本）ひつかけたにす
ぎないのさ。
5. 用があつたら何時でもよんで下さい。
6. 昨晚は試験勉強で夜通しした。

7. 何か腹痛にきくよい藥を御存じありませ
んか。
8. 御母堂様によろしく御鳳聲願上候。
9. 下女が障子の蔭で秘密話（會話）を立聞
きした。
10. 走つたり歩いたりして歸つてきました。
11. 何がおかしうつて笑つてゐるのです。
12. 申し兼ねますが水を一杯もつてきて下さ
い。
13. あなたはごなた様でございますか。
14. あなたとおちかづきになることは大變な
よろこびでございます。
15. 不意に一つの人影があらはれて彼女をさ
らつてゆきました。

..... 課題 第三

(締切十一月末日 發表一月號)

1. お尋ね致しますが山田村はあの山向ふで
すか。
2. 僕の考へでは行かない方がよいと思ふ。
3. ほんこの事をいへばよかつたのに。
4. 僕がごんなに當惑してゐるか考へてみて
くれ給へ。
5. 光るもの必しもダイヤモンドにあらず。
6. その事を知つてゐる者は誰もいない。
7. 誰か君の代りに來るのか。
8. そんなことは俺の知つた事でない。
9. その事を知らぬは亭主許りなり。
10. 長い事お話をすつたんですから、さぞお
疲れでせう。
11. まあ、どう致しまして。（お世辭に對し）
12. あなたは……様であらつしやいますか。
13. 御迷惑をかけましてあひすみません。
14. 色々やつてみましたがだめでした。
15. 誰が來たのか（出て）いつてごらん。

米國よさらば (小坂氏) (滯米日記抜萃)

★10月15日ホテルの拂をして Michigan Central 鐵道の停車場へゆき荷物を一時預けにして電車で Tobias Siegel 氏方へゆく。またビールをのまされる。Flemming 及 Vongerecht 氏来る。今日は講習會の日で Siegel 老は奥で講習をやる。了つて講習生の中男三人も一緒になつてビールをのむ、元來この講習會員連はエスペラントを習ふのが目的ではなくて Siegel 氏のビールをのみたさにやつてくるのだといふ。Tobias 老曰く、前に佐羽君が來たが實に謹嚴寡黙なので日本のエスペランチストは皆そうかと思つたらお前はよく飲みよく駄じやれるといふ。そんなら吾輩は *mal-scheinheiliger Hund* だろうと大笑した。蓋し老は酒をのめない連中を *scheinheiliger Hund* (獨逸語: *ŝajnesankta hundo*) とけなししてゐるといふ事を Flemming から聞いてゐたのである。Flemming は *girl friend* (*knabino-amikino*) にあふ約束があるからさて先へかへる。日本にきた彼の曰く僕はその娘と *apartamento* を借りて同居しようとしてゐるのだが彼女は結婚を望んでゐる。日本娘なら喜んで結婚するがアメリカ娘なごき誰が結婚するものかと。Vongerecht 氏が停車場迄送つてくれるといつてゐたのだがすつかりよつばらつて泰山既にくづれたので一人で電車で停車場へかへり殆んど出發前に寢臺車へのる。

★10月16日6時20分ナイヤガラ瀑布につく朝食をすませ兎に角人の見る所だから自動車で約二時間瀧の見物をやる。10時過の汽車でバッファローへ。12時頃 Buffalo 着。エスペランチスト Donald E. Perish 氏の會社 Herbert Marris Inc. へ電話をかける。既にひけ過ぎだと思へて答がない。晝食後14時頃雨中を電車で 1011 Elmwood Ave. の同氏宅へ行つてみる。留守で戸が閉つてゐる。止むなく町の見物をする。21時35分發車。

★10月17日7時50分紐育 Grand Central Station 着、ホテルニュートンへゆく。

★10月17日紐育着後は翌昭和2年2月26日紐育を出發して渡歐する迄役所へ出す報告書きに日を送りあまり活動できなかつた。

★10月23日役所へゆく。Sayers 氏から電話でニューギニアのエスペランチストが來たから晝食を共にしようとの事で13時タイムスビルデシグの地下室で同氏を待合せ *restoracio* へゆく。Sayers 氏夫人, F-ino Jones, S-roj Schmidt

& Benŝaĥar も来る。散髪屋へよつてかへる。

★11月20日19時 Green Witch Inn (68 E. 11th St.) に於ける Harmonio 會の *barĉo* に出席。正金の M. Kurai 氏来る。氏は正金に行つた時丁度窓口に居り、吾輩の名からエスペラントを思ひ出してエスペラントをやつてみたいとの事であつた故、今夕の會の事を S-ro Klagin から通知してもらつたのであつた。食後例によつて S-ro Klagin の巧みな司會でプログラモが進められ例によつて「米國に於ける同志の印象」てな題で吾輩もしやべられる。23時からダンスが始まる。24時半頃先へ引あげる。

★11月21日。一日下宿で書き物。夕菅氏話しに來らる。菅氏は當地の邦字新聞紐育新報の記者である。朝食を平野さん方でこしらへてもらひ一緒に食事をしてゐる。大にエスペラントに賛成されたので「愛の人ザメンホフ」一部を呈する。

★12月4日19時半 Hotel Endicott (81 E.) における New York Esperanto Society 及 Harmonio 會聯合の吾輩の送別會に出る。何分にも報告書きがどの位ですむかわからないが米國を去るのは1月末か2月初めと云つて置いたので此の前の Harmonio 會の *barĉo* の時送別會の話が出て New York Esperanto 會の會長 Morry 氏が聯合でやるのなら一月の會(第一土曜)は1月1日に當り駄目だから12月に切りあげてしようではないか、少し早いが小坂氏を wash out するわけではないのだからその後出發迄引きつゞき會へ御出席を乞ふとの事で今日と決められたのである。會長の Morry 氏司會。出席二十餘人。ニュージャーニー州 Paterson に居る J. F. Morton 氏は何分遠方だから中座をするとして例の熱辯をふるつて先に歸へられた。米國に於けるエスペラントの辯舌家は同氏とフキラデルフィアの若い Bay 氏が第一であらう。埃及の熱血兒(尤も種はリトニアかどこかだが)兼イソガシ屋の Benŝaĥar 君は近頃矢張り對岸のニューワークに居るのでこれも列車がなくなるからさて先へかへる。歸るに臨んでチューツと吾輩にキッスをしていつたのには面喰つた。次で別室にうつり Morry 氏が挨拶をなし、小坂君を一番よく知つてゐるのは Sayers 氏だからさて Sayers 氏に一なきなす。むやみに矢鱈にほめあげられ頗る恐縮する。最後

に吾輩の挨拶あつて散會したのは24時。出席の Marootian 君(ボストンに居たアルメニアの青年)の話ではボストンの Frost 氏の病氣(狂氣)は一時よかつたがまた最近悪い由。米國エス界にまつて眞に悲しむべき事である。

★12月13日 Morris 夫人より日本からエスペラントの本がごつさりごいたが中には表題が日本語でわからぬのがあるから来てみてくれとの事で13時半に同夫人邸へゆく。晝食によばれる。お嬢さんの Alice さんと F-ino Jones さんが陪食。丁度一年前紐育へ始めて来た時同様晝食によられたがその當時から見るに F-ino Jones (例の International Auxiliary Language Association of America の幹事)さんは大分エスペラントが上手になつてゐる15歳の Alice さんに今エスペラントの本は何を讀んでゐるかと問へば Vivo de Zamenhof だといふ。あの本は文體が一種變つてゐるから六ヶ敷だらうと云へばやさしいとの答で一寸驚かされた。食後、本を見て表題をつけてやる。

★12月18日 Harmonio 會の barêo 本夕は平野、菅兩氏及菅氏の友人たる村岡氏(領事館)と吾輩と日本人が四人出て日本人村をつくる。例により音楽と演説とがあり又例により演説をさせられる。23時半頃ダンスが始まる。Schmidt がいゝ vino があるから飲まふと back room にゆく。Sorensen 夫人達六七人がもうしけこんで飲んでゐる。Schmidt 及び Poker 氏とのんでゐると菅氏がもう遅いから歸らうと迎へに来たがミイラ取りがミイラになつて飲み始めた。その中に平野さんが呼びに来てお興があがつたが菅氏は大によつて大機嫌。下宿にかへつたのが二時。

★12月19日 D-ino Davis, S-ino Sorensen, S-ro Schmidt を明日日本食へ招待したのだが「都」の番地をまちがへて教へたことに氣がつき Sorensen には電報を打つ。

★12月20日 朝 S-ro Schmidt に電話をかけて「都」の番地の訂正をする。17時平野氏と D-ino Davis をキャピトル座で待ちうけ「都」へゆく他の二人もくる。日本料理は S-ro Schmidt 以外は始めてなので皆よろこんできれいに平げる S-ro Schmidt は大いに飲んで御機嫌である。

★12月28日 18時平野氏と共に Schmidt 氏の事務所(12E. 41st St.)にゆく。獨逸から新來の Erich Kawaletzke 氏も来る。一同地下鐵で D-ino Davis 方へゆく。今日は同嬢の誕生日だつたのだそうだが、それを云ふと皆が何かもつて来るさいけないからとだまつてゐたの

だそうである。Sorensen 夫人もくる。Davis の兩親や兄弟たちと夕食をする。食後大勢やつて来てダンスが始まる。

★昭和2年1月1日 在米第二回目のお正月である。年號も變つて昭和となつた。昨年はボストンで獨りのお正月であつたが今年は平野氏方で菅氏と共にオゾーニやゴマメで日本らしいお正月をした。

★1月15日 夜 Harmonio 會の barêo に出席。日本人は平野、菅、菅氏の友人の四人。例の通り音楽と演説。吾輩はいつも演説をさせられるから今日は目先をかへて日本の民謡にするさて、船頭歌の「下へ下へさ」のエス譯を歌ふ。

★1月22日役所へゆく。日本エス學會臺灣支部長杉本良氏が訪れて來られた。丁度リフトの下であひ一緒になつた暫く話す。

★2月13日 18時5分タクシで International House (500 Riverside Drive)へゆくロビーに F-ino Jones がまつてゐてくれる。この Int. House は諸國から來てゐる學生の宿舍と社交のために建てられたもので毎日曜色々な民種の學生が500人位集つて晚餐會をやる。獨逸の學生 S-ro Albert Baer も來て同じ卓につくエスに就て興味のある方は來てくれと云つたが他に面白い會が二つあり其方へお客をさられてこちらへは三四人しか來ない。座談的に三人でエスについて説明する。こゝで Jones 嬢がエスの大講習會をやつたことは Revuo Orienta にでてゐた。

★2月19日晝食後 Town Hall の鈴木延子女史の Lied の獨演會へゆく。赤星技師、Klaĝin 氏も来る。菅氏もくる。16時半頃すむ。出口で Schmidt 及杉本兩氏大阪朝日の北野氏(杉山隆治君と同窓)にあふ。19時半 Harmonio 會の barêo にゆく。今夕は杉本、平野、菅、北野、菅氏の友人及吾輩の六名の日本人出席。モントリオール(カナダ)の Bardov 氏が來た。會の役員改選。Sayers 氏は自分の會社が解散故地方へゆくかもしれぬから(其後紐育タイムスへ入社)さて會頭辭任。バハイ宗の S-ino Fords を推薦する。満場異議なし。次ぎに Harmonio 會の功勞者 Klaĝin 氏に紀念品を贈る。例によつて吾輩も一しやべりさせられる。これは愈々アメリカとお別れの言葉である。

★2月25日22時頃タクシで家をでる。雨がわびしく降つてゐる。ウエスト14丁目の Pier N-ro 54にゆきキユナードラインの巨船 Aquitania 號に乗込む。午前1時(2月26日)一年有半住慣れた米國は闇の中にすわれてしまつた。

NATURO

【自 然】

de Seisensui Ogiŭara

Esperantigis M. Sasaki

私は天然を美しいと思ふ、葉つばもない棒切れのやうな並木でも暑い埃の中にうろついてゐる蜥蜴でも、——そんな物はつまらない、醜いものぢやないか。さ人がいふ物でも、——私には美しく見える、それは私が其を愛してゐるからだ、それは人の云ふやうに醜いものかもしれないが、私は、美しいものを選んで愛するのではない、たゞ愛したい、而して、愛することに依つて、其が美しく私に感じられて来るのだ。だから、學者が発見したさいふ、美學の法則などは一片の反故だ、美さか醜さか云ふのは其對象其物にくつついてゐる事ではなくて、見る人の愛の深さ、廣さに依つてきめられることだからである。

私は天然に對するやうな心持で人間を見ることが出来ない、人間を見るさ、多くの醜い所が目につく、それが憎みたくなる。然し、それは私の愛の心が狭く浅いからであるに違ひない、人間の心にひそんでゐる惱みを理解しないで、或る規範的な概念から見るが爲めに、其人が醜く見えるのに違ひない、若し、私に愛の心が廣く深くなつてゆくなれば、人間といふ人間に悪人はなくて、皆淋しくあはれなる、死すべき者として、美しく見えて来ることであらう。どうか、さうありがたい事だ、いや、自然と人間と區別することはない、一切のものに醜さいふものはない、一切のものが美しく見えるさいふ境涯に達したいものだ、それには一切のものを理解しうるほごに、自分の心を廣く育てなければならない。一切のものを愛しうるほごに自分の心を深く掘らなければならない。

Mi pensas ke naturo estas bela: eĉ vico da senfoliaj arboj kvazaŭ stangoj, eĉ lacerto sencele rampanta en varmega polvo—eĉ tiuj kiujn oni nomas malbelaĵoj estas al mi belaj, ĉar ilin mi amas. Ili estus malbelaj kiel oni diras. Ne estas tio ke mi elektas kaj amas belajn. Mi simple volas ami, kaj amante, mi sentas ilin belaj. Sekve, la leĝo de estetiko kiun eltrovis scienculoj estas nur sensencaĵo. Ĉar beleco aŭ malbeleco ne apartenas al la objekto mem, sed estas decidita per profundeco kaj vasteco de la amo de la vidanto.

Mi ne povas rigardi homon kun la sama teniĝo kiun mi havas kontraŭ naturo. Kiam mi vidas homon, troviĝas ĉe li multe da malbelaĵoj kontraŭ kiuj naskiĝas malamo. Tio devas deveni de la malvasteco kaj malprofundeco de mia amo. Devas esti ke homo ŝajnas malbela, kiam mi rigardas lin per koncepto kategoria kaj ne komprenas lian ĉagrenon internan. Se mia amanta koro vastiĝas kaj profundiĝas, jam ne ekzistas malbonulo, sed ĉiuj homoj vidiĝos belaj kiel solecaj, kompatindaj mortemuloj. Kiel mi deziras esti tia! Ne, oni ne povus distingi naturon de homo. En nenio ekzistas malbela. Tre dezirinde ke mi povu atingi tian staton, ke ĉio estas al mi bela. Por fariĝi tia, mi devas kulturi mian koro vastan por ke mi ĉion povu kompreni, kaj mi devas fosi mian koro profunde por ke ĉion mi povu ami.

VERSAĴOJ

VOJAĜO de l' VIVO

Masuzo Inoue

Sencele mi kuras nur arde,
Por kio ja scias Di' sola.
Esperas mi trovi hazarde
Senfinon en koro tre mola.

Mokridoj ataku min peze!
Kun songo mi marŝos silente.
Sen timo mi paŝos freneze
Kaj spiros finfine kontente.

Tra l' vasta dezerto de koroj
Mi migros solece sed ĝoje.
Ĉe l' mez' de mallumaj fimoroj
Mi ĉion ridetos survoje.

Poet' ne mi estas domaĝe
Sed aŭdas senŝonan muzikon.
Revplene mi kantos vojaĝe
Serĉante eternan amikon.

(la 4-an de Aŭgusto, 1927)

LULKANTO

K. Maeda

Dormu ci ripozu mia,
Dolĉe ĉiam songu ci
Kun favoro lunradia
En la ĉarma harmoni'.

En la brakoj de patrino
Bonan aŭdos kanton ci:—
Pri anĝelo, pri feino,
Kun la bela melodi'.

Kiam cin patrino metos
En la dormon, bona Di',
Tre afable tuj ridetos
Kaj karesas nun al ci.

En ĝardeno songa bela
Ĝoje floras jen lili':
Kun facila mov' ĉiela
Flirtas gaje papili'.

Kiam tago ree venas
Kun varmeta sunradi'.
Cin birdetoj ankaŭ benas
Pepas kanton kanari'.

(1927-6-10)

Akompanante Juan Eul,

kiu ekvojaĝis kun komisio al Ansi.

de Ŭan-Ŭei, trad. el ĥina S. Joŝino

En Ŭej-ĉeng matena la pluveto
La polvon malpezan Malsekigis.
Nun ĉirkaŭ gastejo ĉio verda:
Folioj salikaj estas freŝaj.

Nu amiko karega malplenigu
Ankoraŭ da vino unu glason
Pasejon de Jang-kŭan forlasante
Vi tute ne trovos plu konatojn.

勸君更盡一杯酒
西出陽關無故人

渭城朝雨浥輕塵
客舍青青柳色新

送元二使安西
王維

Vidu Japanlandon, kiu vivas !

MASUZO INOUE

LA ravaj ĉarmoj de Japanlando, parkolando de la tuta terglobo, estas nun fame konataj inter inteligentuloj tra la mondo. Ĝiaj allogaj pejzaĝoj kaj imponaj naturŝanĝiĝoj, kiuj ĉiam naskigas al sentemaj homoj belajn poemojn, estas ofte priskribataj en diversaj verkoj kaj ofte priparolataj inter ĝiaj amantoj diverslandaj.

Briletaj sunradioj frumatenaj tra verdaj folioj de pinarboj starantaj sur pura blanka sablejo laŭlonge de marbordo ! Orkoloraj vesperaj nuboj duone kovrantaj malproksiman bluan montaron kun neĝa krono klare videbla trans vasta verdiĝanta kampo, sur kiu tie kaj ĉi tie sidas pacaj dometoj kun deca arbaro ! Mondfamaj *sakura* (ĉerizfloroj) ornamantaj printempan digon, altkreskintaj *sugi* (japanaj cedroj) dense kovrantaj someran valon, ruĝaj kaj flavaj folioj de aceroj, gingkoj ktp., kolorigantaj aŭtunan monton ! Ni povas ja cetere citi multajn unikajn pitoreskaĵojn, kiuj apartenas al la naturo de Japanlando.

Fremdlandanoj estas verŝajne jam sufiĉe konvinkitaj pri la beleco de nia lando, la Lando de Leviĝanta Suno, la lando reprezentata de Monto Fuji kaj Nikko. Ĉu do Japanlando estas sole bela parkolando, kiu estas nur benata de reviga allogaĵo ? Ĉu ĝi estas kvazaŭ paradizo, kiu konas nenian ĉagrenon ? De la tempo de Marco Polo, kiu enfaze skizis fabelsimilan ĉarmecon de orplena "Zipangu" antaŭ pli ol ses jarcentoj, Japanlando estas prenata nur kiel stranga landeto en la Oriento. En la mezepoko aventuramantoj el kelkaj okcidentaj landoj ektravivis japanan socion, kiu tamen baldaŭ poste estis fermata al preskaŭ ĉiuj fremdlandanoj laŭ la principo de Tokugaŭa Ŝogun-Registaro ĝis la komenciĝo de Meiji Epoko, kiu ebligis scivolemajn fremdlandanojn kompare precize koni nian landon. Multaj alvenis el diversaj landoj, aŭ por negoci, aŭ pro religia misio, aŭ por trarigardi la strangan landeton. Multaj rigardis Monton Fuji kaj Nikko. Multaj ĝuis *sakura*. Multaj foraĉetis *niŝikie*, japanajn unikajn belartaĵojn. Multaj venis kaj multaj foriris returne. Multaj kredis, ke ili prdfunde konas japanan vivon. Ĉu do ili prave kredas ? Ĉu ili efektive elĉerpis veran japanecon dank' al sia dumtempa restado ?

Estas granda dubo, ĉu ĉiuj alvenintoj el fremdlandoj vere kaj profunde ekkonas la efektivan valoron de nia lando. Japanaj belartoj, precipe *niŝikie*, japanaj literaturoj kaj teatraĵoj kredeble instruas ilin iom. Sin trovas tamen granda malfacilo por ili dum la japanaj lingvo, vivmaniero, moroj kaj religio ktp. estas rimarkinde malsamaj kompare al la iliaj. Tio

〔生ける日本を見よ〕

【註】 rava 恍惚たらしむる。 park'o'lando 公園。 ter'globo 地球。 intelligent'ul'o 知識階級人。 al'logi 誘ふ。 natur'sanĝ'iĝo 自然の變化。 fru'matena 早朝の。 sabl'ejo 砂原。 laŭ'longe de ~ ~ に沿つて。 mar'bordo 海岸。

neĝa krono 雪の冠。 digo 堀。 alt'kresk'intaj 高く繁茂せる。 cedro 西洋杉。 acero 楓。 gingko 銀杏。 unika 随一の。 fremd'land'ano 外國人。 ver'sajne 恐らく。 lev'ig'anta suno 旭日。 rev'iga 空想にふけらす。 paradizo 樂園、天國。 Marco Polo マルコ・ポーロ。 fabel'

tre malhelpas ilian komprenon.

La esenco de nia moderna vivo ne estas tiel simpla, kiel ĝi estas facile kaptata de dumtempaj vizitantoj. Ĝi estas intermiksiĝo de niaj tradiciaj vivenhavoj kaj nove naskiĝintaj sociĉagrenoj, kiuj estas komunaj ĉie en diversaj modernaj landoj; nome kunligo de malnova kaj nova flankoj de la sama nacio. La antaŭa estas ofte citata de fremdlandanoj, kiuj interesiĝas je *niŝikie*, *sumoo* (luktado), *noh* (klasikaj pantomimoj) ktp. La lastan atente rimarkas nur malmultaj turistoj. Des pli malmultaj inter tiuj, kiuj nur supoze imagas Japanlandon de malproksime en diversaj landoj.

Ankoraŭ nun restas kelkaj, kiuj pensas Japanlandon kiel parteton de Ĥinlando. Japanoj en alilando estas ne malofte demandataj: ĉu ili havas fervojjn, telefonojn, universitatojn ktp. La plej ofendema eĉ demandas, ĉu ni havas elektrajn lampojn. Alilandanoj precipo ne-vizitintoj ofte al si prezentas Japanlandon, kiu estas plenaj je *samurai* (feŭdalaj kavaliroj) kun *ĉommage* (harligo), kiuj kuraĝas facile agi *harakiri* (sinmortigon) kaj venĝon, burĝoj vojaĝantaj per *kago* (brankardo-simila veturilo) kaj *oiran* aŭ aliaj ĉiesulinoj. Estas ridinde, ke ili pensas vivanta la enhavon de *niŝikie* kaj *kabuki* (tradiciaj teatraĵoj), kiuj ambaŭ montras nur antaŭjarcentan vivon de niaj prauloj, *ĉommage* nun restas nur en peruko uzata en teatraĵo. Bovveturiloj uzitaj de antikvaj altranguloj restas nun nur en muzeoj. Virinaj movadoj jam estas minacantaj ekziston de ĉiesulinoj. Kvar disaŭdigaj stacioj de radio ĉiutage agadas. Fervojoj atingas jam dek mil mejlojn. *Harakiri* kaj venĝo neniam plu apartenas al virtoj sed kontraŭe estas pensataj kiel krimoj. Proletariaj literaturaĵoj naskiĝis el sango kaj larmo de reala laborista vivo. Internaciema pensmaniero bazita sur vera patriotismo nun ekĝermas eĉ en la koroj de geknaboj en elementaj lernejoj.

La bela naturo de nia lando estas preskaŭ sensanĝiĝa de la pratempo ĝis nun almenaŭ en sia ĝenerala konstruo.

Tamen la vivo mem de japanoj jam ne estas sama kiel en aktikvaj epokoj. Ĝi neniam plu estas "Zipangu" de Marco Polo. Ĝi neniam plu estas la lando de *samurai*. Japanoj en *kimono*, loĝantaj en ligna domo kun paperaj ekranoj, kaj manĝantaj rizajn, nun spiras modernan aeron kaj ĉiam entuziasmas por serĉi veran celon de la nova kulturo kaj konstrui signifoplenan epokon por la bono de la tuta homaro.

Ni elkore alvokas al vi, ĉiulandaj kosmopolitoj: vidu Japanlandon, kiu efektive vivas! Venu, vidu kaj — ne venku — sed kunsentu kun ni, precipe per nia komuna lingvo internacia, kiu neniigas ĉefan malfacilon kontraŭ via kompreno de nia vera vivo kiel tiun de homaranoj!

Vidu Japanlandon, kiu vidas!

simila お伽噺的。or'plena 黄金のみちた。
mez'epoko 中世記。aventur'amanto 冒険好き
の人。ek'tra'vivi 経験し始む。ŝogun-reg'ist'aro
將軍政府(=幕府)。sci'vol'ema 好奇心ある。
aŭ... aŭ... 或は...或は...。misio 傳道。bel'-
art'aĵo 美術品。el'ĉerpi 汲みだす。brankardo

擔架。ili pensas vivanta la enhavon...=ili
pensas la enhavon... vivanta=ili pensas ke la
enhavo... estas vivanta 錦繪や歌舞伎の中味
が今でも現存するを考へてゐる。peruko かづ
ら。alt'rang'ulo 高位の人。muzeo 博物館。
ĉies'ul'ino 總嫁(淫賣婦)。

Verda Letero de Profesoro H. Asada.

[4]

Leningrado, la 17an de Majo, '27.

Kara samideano,

La 15an ni alvenis al Moskvo kaj hieraŭ matene ni alvenis al Leningrado. Ĉie samideanoj afablege prizorgas pri niaj aferoj. Sed supozo de S-ro Tomimacu estas tute erara. Ni ne povas ŝpari monon, sed devas pagi tre multe dum la vojaĝo tra Siberio kaj Rusujo. Ni estas tamen tre kontentaj kaj malgraŭ laciga longa vojaĝo tute sanaj.

Koran saluton al vi, Via Asada.

[5]

Varsovio, la 22an de Majo.

Alveno al Varsovio tre ĝojigas nin, ĉar dank' al la zorgemo de S-ro Dro Essigman, del. de UEA, ni povis renkonti samideanojn ĉi-tieajn. La ĉirkaŭaĵo estas tre malvasta.

H. Asada.

(Sur tiu ĉi poŝtkarto subskribas
kun li 10 samideanoj tieaj.)

[6]

Parizo, la 29an de Majo.

Kara samideano,

Ni alvenis al Parizo la 24an frumatene. Ni ne antaŭsciigis la horon de nia alveno. Ni tuj loĝiĝis ĉe la hotelo nomata "Hotel Jeanne d' Arc," 59 Rue Vaneau Paris VII.

Dank' al la konatolino, ĉe kiu mi antaŭe loĝis, mi aĉetis vestaĵojn de mia edzino. En lastaj tiuj ĉi tagoj mi estas tute okupita pro la gvidado de mia edzino tra la urbo. Mi preskaŭ ne havas tempon eĉ skribi al taglibron, jam ne parolante pri manuskripto, kiun mi promesis sendi al ĵurnalo. Tradukado de referatoj en Esperanton ankoraŭ ne estas preta. Nun ni jam supraĵe vizitis vidindaĵojn de la urbo. De nun mi devas labori, skribi, observi k. t. p.

En Moskvo escepte de la kora afableco de samideanoj mi sentis ke ĉio estas malagrabla, ĉar manĝaĵo estas tre malbongusta kaj tre kara. Tial oni manĝas preskaŭ nur unu fojon ĉirkaŭ la tria horo posttagmeze. Ni ankaŭ en Sovieto manĝis nur unu fojon ĉiutage. Plie ĉiu komercaĵo estas vendata de guberni-

magistrato, kiu volas gajni monon por plibonigi la administradon de komunistoj. Precipe ĝi volas eltiri la monon el poŝoj de fremduloj, kiuj loĝas ĉe hoteloj. Tial la pago por hotelanoj estas terure multekosta. Aŭtomobilo estas ankaŭ tre multekosta, t. e. po du dolaroj unu horo. La vivo en Sovieto estas sekve malbenata por fremduloj kaj antaŭaj aristokratoj.

En Leningrado, kiu jam ne estas la ĉefurbo politika, la vivo estas pli agrabla. Tie mi plivastigis mian konon specialfakan, ĉar profesoro Ŝorr, kiu venis antaŭ 20 jaroj kiel militkuracisto al Nagasaki tre ofte kaj ĉiujn vidindajn urbojn travojaĝis, montris al mi sian tute specialan dissekmetodon, la plej oportunan kaj praktike utilan.

Dank' al tieaj samideanoj, kiuj prizorgis sindoneme pri nia afero, ni povis havi okazon viziti la sanigejojn de laboristoj kaj vidindaĵon senpage per aŭtomobilo de la registaro.

En Moskvo ankaŭ samideanoj estis tiel afablaj vizitigi nin senpage la baleton ĉe la granda operdomo. Pro tio tamen ni povis neniom ŝpari, sed male ni elspezis multe, ĉar ni ĉiam pagis por multekostaj veturado kaj manĝaĵo.

En Bialystok oni bonvenigis nin ĉe la stacidomo laŭ via antaŭsciigo kaj vizitigis nin tra la urbo, precipe la naskiĝdomon de nia Majstro. Verdire laŭ la konsilo de Moskvanoj k. a. ni intencis trapasi la stacidomon senhalte, skribinte kaj telegrafinte pri tio al S-ro Del. de UEA, sed nia anonco plimalfruiĝis ol nia alveno. Dank' al tio ni povis havi okazon viziti la memorindan naskiĝĉambron de nia estimata Majstro, kie ni ĉirkaŭrigardis kaj enpensiĝis kun profunda emocio. Ĉe ĉirkaŭvizito tra la urbo amaso da homoj sekvalidis nin, por rigardi la japanan kostumon de mia edzino. Tie oni bonvolis kunsidi por ni ĉe la ejo, kiun oni rearanĝis okaze de nia alveno ĵus antaŭ tri tagoj. Ni estas nun tre bonaj reklamiloj kaj propagandiloj.

La unuan fojon mi paroladis ĉe la kunsido de komunistaj Esperantistoj en Moskvo, la duan fojon en Bialystok kaj la trian fojon en

(daŭrigota sur p. 274)

AKTORO

Unuakta drameto.

Originale verkita de

K. Nakagaki.

PERSONOJ:

K., aktoro 33-jara.

M., vidvino 26-jara.

Servistino de M.

TEMPO:

Vespero de malfrua printempo
en Taisô-epoko.

LOKO:

Eksterurbo de Tokio.

Saloneto de la vidvino, kun luksa arango laŭ eŭropa maniero. Maldekstre pordo. Elektrolampo kun ornamita ŝirmilo pendas de la mezo de la plafono. Sub la lampo sidas tablo, ĉirkaŭ la tablo kelkaj seĝoj. Fono estas muro, kiu kadras meze fenestron. Kaj dekstre de la fenestro pendas portreto de viro belaspekta.

Vidvino, M. sidas sur unu el la seĝoj peze apogante sin sur la tablo, tute senmova. Ŝi estas vestita per eleganta "kimono". Ŝia hararango estas iom malordigita. Post minutoj ŝi subite levas sin, fikse rigardas antaŭ sin, kun malforta ĝemspiro, fermas okulojn, profundigas en pensoj.

Malgaja ironia rideto aperas sur ŝia vizaĝo. Malrapide ŝi turnas sin malantaŭen kaj rigardas la portreton.

Hahahaha! ha! ha! ŝi ridegas histerie. Denove ŝi fariĝas melankolia, apogas sin sur la tablon.

(Paŭzo.)

(*Oni frapas.*)

M. (*ekstaras kun surprizita mieno.*)—Kiu?

Servistino (*malfermas la pordon.*)—Sinjorino! Oni petas vin vidi.

M.—Kiu estas?

Serv.—Sinjoro K. petas vin vidi!

M.—Sinjoro K.? Ĉi tien, do! (*Servistino aranĝas seĝon kaj foriras. Dume vidvino M. rapide elprenas kombilon kaj speguleton el la sako, kiu kuŝas sur la tablo, klopodas ordigi la harojn, sed dum ŝi ankoraŭ ne finas ordigon, eniras viro, kies aspekto estas unuvorte de bela ĝentlmano. Ŝi rapide kaŝas la kombilon kaj la speguleton ĉe sia zono.*)

K.—Bonan vesperon, sinjorino! Mi havas plezuron vin vidi!

M.—Bonan vesperon, sinjoro K.! Nu, bonvolu preni la seĝon!

(*Ambaŭ sidiĝas.*)

—Tre longe mi ne vidis vin, ĉu ne?

K.—Jes, sinjorino! Ĉar mi restadis en Atami dumtempe.

M.—Pro via sano?

K.—Ne, sinjorino! Mi havis liberan tempon.

M.—Ĉu la teatro ne okupas sin lastatempe?

K.—Pro la malagrabla malpaciĝo inter ni kaj la administrantoj de la teatro, kiel vi eble scias, ni ne havis prezentadon portempe. Sed jam finiĝis la afero

kun nia triumfo, ni havos de post kelkaj tagoj. De nun ni povos elekti dramojn laŭ nia plaĉo, ni povos ludi tute libere, kun nenia limigo. Do, bonvolu honori nin per via vizito, mi petas vin, sinjorino!

M.—Nepre mi havos la plezuron, kaj kian dramon vi elektis ĉi-foje.

K.—Ni ludos je tri novaj dramoj. (*Li elprenas bileton kaj programon el la poŝo, metas ilin antaŭ ŝi.*)

Jen la karto por vi, sinjorino!

M.—Ho! por mi? Kiel danko mi estas, sinjoro! Kaj, (*rigardante la programon,*) bonega elekto! Ho, mi legis du unuajn kun granda interesiĝo kaj kortuŝiĝo, kiel granda estos la sukceso! Sed, diru al mi, sinjoro, kiu estas la verkinto de l' lasta dramo, mi ankoraŭ ne informiĝis ĉe pri la titolo... Akeidento de H.—minejo.

K.—Jes, tio estas la plej nova, ankoraŭ neniu scias krom ni. Mia propra verkaĵo ĝi estas. Kaj mi mem ludos la rolon de l' heroo (*akcente*) laboristo de l' minejo.

M.—Ĝi nepre devas esti interesa. (*Ŝi interrompas siajn vortojn, kvazaŭ io ektuŝis ŝian koron, ekrigardas okulojn de K., kiu tute indiferece ekbruligas cigaredon.*)

Dume servistino alportas teon kaj kukon, metas ilin sur la tablon, demande atendas sinjorinon, tiu ĉi diras

nenion, kun riverenco servistino foriras.

K.—Tamen, ŝajnas al mi, ke vi estas elironta.

M.—Ne, sinjoro, verdire mi ĵus revenis.

K.—Ĉu? (*fikse rigardas la vizaĝon de l' virino.*) Mi vidas, ke vi estas iom pala hodiaŭ. Kiel vi fartas?
 M.—Jes, mi sentas min malforta, sed ne grave.
 K. (*iom ironie.*)—Via hararaĝo estas malordigita, ĉu ne?
 M. (*ekfrapite.*)—Jes! V... Verdire, mi havis akcidenton revenvoje.
 K.—Kio okazis? (*klinas sin antaŭen, fervore.*)
 M.—Fiulo persekutis min. Jes, tie, proksime de la vojkruco, apud la arbareto, subite ĉirkaŭbrakis de malantaŭ mi la... (*kvazaŭ ekpikita de siaj propraj vortoj ŝi eksilentas.*)

K.—Kaj? (*instigante daŭrigi.*)

M.—Tuj post vesperiĝo, ... mi efektive konsterniĝis...
 .., neniu domo troviĝas ĉirkaŭe..., neniu mi vidis survoje..., tamen..., mi baraktis kun tuta forto kaj fine mi povis forpuŝi lin, kaj kuregis hejmen. Mi revenis hejmen tute laca, morte timigita, kaj kiam oni anoncis vian viziton, ankoraŭ mi ne havis forton eĉ ŝanĝi vestojn.

K.—Kia domaĝo! Kaj kia homo li estis?

M.—Supozeble li estas laboristo. Kun malpura ĉemizo kaj eluzita pantalone...

K.—Ĉu li ne ŝajnis es' minlaboristo?

M.—...? (*faras maltrankvilan mienon.*)

K.—Kian vizaĝon li havis? (*fikse rigardas siajn okulojn.*)
 M. (*malleas rigardon sur la plankon, kvazaŭ ŝi timas okulojn de l' viro.*)—Sunbrunigita vizaĝo.

K.—Ĉu li havis vizaĝharojn?
 M. (*senkonscie.*)—Pikemajn vangharojn.
 K.—Ĉu li havis longajn kapharojn?
 M. (*kun tute ĝenita mieno.*)—Kion vi intencas, demandante tiamaniere? Mi jam ne volas paroli pri tia malagrablo. Mi mem ne vidis tiel atente, plie jam estis mallume!
 K.—Nu, mi estis kulpa, pardonu min, sinjorino! Tamen kia domaĝo!
 M. (*senvorte spiregas.*)

(*Paŭzo.*)

—Ĉu vi havas ian specialan aferon hodiaŭ?

K.—Jes, mi venis al vi ja, kun grava afero. Tamen, mi petas, ke vi retransviligu antaŭ ĉio, sinjorino!

M.—Nun mi estas trankvila, sinjoro.

K. (*silentas momenton, ekrigardas la portreton sur la muro, kaj ekparolas.*)—Jam pasis du jaroj post kiam S-ro T. forlasis nin, ĉu ne?

M.—Jes, sinjoro! Ĝuste pasis du jaroj. Hodiaŭ estas la dua datreveno. Mi vizitis lian tombon hodiaŭ matene, kaj revenvoje mi tuŝis la oficejon de nia asocio, kie mi pasigis tempon tro multe, babilante kun kamaradinoj.

K.—Kiel prosperas via afero? Jes, mi ofte legis sur ĵurnaloj pri via movado. Tamen, laŭ mia opinio, vin agemajn virinojn atendas pli grava afero, ol la politika movado!

M.—Ankaŭ ni estas rimarkintaj pri tio, tamen nia nuna agado estas ankaŭ nepre necesa, krome, se ni subite ŝanĝos la celon sen sukceso, malbone rezultos sur la virina afero. Ni do intencas iom post iom ampleksigi nian movadon. Ankaŭ mia mortinta edzo estis entuziasma feministo. Mi prenis sur min lian volon kiel heredaĵon, kaj decidis oferi mian restan vivon al la afero.

K.—Belega ideo! Sed, ĉu vi jam tute ne pensas pri reedziniĝo?

M.—Ne, sinjoro, kompreneble tute ne. Mi firme decidis pri tio, kiam mia edzo forlasis la mondon. Li amis min tu kore, ankaŭ mi amis lin per mia tuto, kiel vi mem bone scias. Mi restos fidela al li por ĉiam.

K.—Mi volus respekti vian decidon, tamen, via maniero estas iomete inertece, ĉu ne?

M.—Eble jes! Mia edzo jam ne estas vivanta ekzistaĵo. Mi ne pensas, ke mi povus denove kunvivi kun li en alia mondo, ke mi estu fidela virino kiel instruas malnovaj moralistoj, kaj tiel plu, tamen, mia sento estigas min kiel mi nun estas. Lia morto neniom ŝanĝigis mian amon, mi havas multajn ĝojajn dolĉajn memorojn. Tio sufiĉas al mi.

K.—Sed vi estas tiel juna, kaj tiel bela, ĝuste vi nun estas en floranta virineco. Kaj nun ankaŭ floras printempo de sezono. Birdoj, bestoj, ĉe insektoj sopiras je amo, ebrias, satureĝas en ama plezuro. Rememoro

de amo estus dolĉega por vi, sed rememoro de dolĉa amo iam eĉ pliigus vian deziron, kiun vokas via sango vigle fluanta sub via bela gracia haŭto. Ĉu vi efektive neniam sentas vin soleca?

M.—Sinjoro K.! Jam sufiĉas al mi tia parolo. Nur diru al mi pri via propra afero, mi petas!

K.—Tio ankaŭ koncernas je tia afero, mi ja turnis min al vi por instigi vin reedziniĝi.

M.—Ha! Sinjoro! Se estas tiel, jam ne necesas via zorgo. Kiel mi ripete diris mia decido neniam ŝanceliĝos.

K.—Tamen ankaŭ mi venis kun firma decido. Mi devas peti vin almenaŭ aŭskulti min, kaj, se vi diros fine, ke mia espero estas tute vana, mi devas rezigni.

M.—Do, bonvolu paroli, kiom vi povus trankviligi vin.

K.—Sinjorino! Laŭ via afabla permeso, mi parolos pri iu persono, kiu freneze amas vin. Laŭ li, vi estas la sola trezoro, kiun li sopiras havi en la mondo.

M.—Kiu li estas?

K.—Pri tio vi poste ekscios, nur aŭskultu, mi petas! Li enamigis eu vin jam antaŭ dek jaroj.

M.—Ne ŝercu sinjoro! Se tio estus vera, kial li ne komunikis min antaŭ ol mi edziniĝis?

K.—Vi estas prava. Estus certe bone, se li povus fari tion, sed tiutempe li ne havis kuraĝon, ĉar kiam li enamigis en vin, vi estis ankoraŭ 16-jara knabino, plie vi estis riĉega nobelulo, dum li estis mizera

趣味に従ふことは大變有害であるといふ我々の意見をこゝに繰返して申上げます。若し我々がかく熱烈にあらゆる不必要な變更に反抗して戦ふとしてもそれは決して或る人々が恐らく考へるが如く我々自身の語形への執着のためでもなく又他人の意見に對する憎惡からでもなくそれは我々の事業——その事業は若し萬一各人が別々に純然たる個人的の意見を固執せんがために自己の好惡に随つて言語を引裂き重大なる必要なくして其れに對して自己の才能を示さんとするならば勿論間もなく崩壊するでもありませう——に對する愛と懸念からでたことであります。(La Esperantisto, 1891, p. 49.)

前 置 詞

“krom” と “ekster”

我々は plena vortaro の中へ “krom” といふ語を入れましたが併し其後或る同志の方々は小さい fundamenta vortareto の中にある “ekster” といふ語を用ひて勿論少し他の意味上の色合はあるにしても全く巧みに “krom” の意味を表しましたのを見て我々も亦この語を “krom” の意味に用ひ始めました。(La Esperantisto, 1891, p. 7.)

“krom”

或語の前にある前置詞 “krom” は其語が我々の話の問題外にあり又我々がそれを別個のあるものとして見てゐることを意味するものであります。故に此語は使用されてゐる所の情況に従つて除外の意味も或は添加の意味をも等しくもつことが出来るのです。“krom” それ自身は除外をも又添加をも意味するものではないのでそれは單に別個に扱ふことを表してゐるのみであります。併し此の別個にすることが或るものを除去するためなのかそれとも反對に一層強めるためなのかはその文自身の意味が示めすのであります。例へば私が “tie estis ĉiuj miaj fratoj krom Petro” と云へば誰しも私が Petro がその “ĉiuj” の中に居らなかつたことを示すために Petro を別個に取扱つ

のです。従つて“kaj”に反對する動機は甚だ些細な事であつて其創造の時代に於てさへ我々が“kaj”の代りに“et, e”を採用すべき場合は單に此兩形の使用され得る可能性が同等の時に於てのみであるべきです。然も兩者の使用可能性はしかく同等ではないのです。即ち“kaj”なる語が全く自由であるのに反して“e”及び“et”は副詞の語尾及び弱小を示す接尾字として必要であつてこれらに對しては他の語を採ることができないのであります。(文法的語尾や接尾字や獨立の語に對して我々は同一の語形を使用する事ができなかつたのです。何となれば我々の言語の構造に従へば「學ばずして辭書を使用し得ることのために」語尾及び接尾字も亦獨立の語であることになつてゐるからです)。若し我々が“kaj”の代りに“e”或は“et”を採るならば我々は副詞の全範疇或は弱小を示す語の全範疇に對して或る粗野な形を附與せねばならないこととなるであります。一範疇をなす語と一個の單一の語との間では我々は前者を撰ぶことは勿論でそれで後者の側に於てその犠牲が惹られねばならなかつたわけです。従つて“e”, “et”, “i”等を採らなかつたことは我々の側からいへば單に『美點を見出さなかつた』ことではなく全く有意的にした事なのです。我々が正當であつたか否かに就いてはもはや今日は語るべき時ではありません、併し既に“e, et”等の放棄が全く動機のないものではなかつた時に於ては破壊といふ犠牲をなしてまで其れを今日採用することに對する理由は益々一層存在しないことになりませう。完成大辭典(Plena vortaro)中の新語に關して個個の語における變更は大害を及す事なくしてなし得るものであります。併し基礎的小辭彙(fundamenta vortareto)中の語殊に我々の言語の存在の最初の日から一歩一歩の上に使用されて大變慣れきつてゐる“kaj”の如き語に對して重大な動機のないのに變更する事はなすべき事ではないと思ひます。意味のない一小語“kaj”に就いて我々がかく廣汎に亘つて話したのはこの一小語の問題を解決するためではなく單に其れが上述の變改が我々に提案されたそのやり方の上に我々同志の注意を喚起すべき機會を與へてくれたからであります。而して我々の如きかゝる共同の事業に於て個人的

たのであることを了解できましょう。併し私が “krom Petro tie estis ankaŭ ĉiuj aliaj miaj fratoj” と云へば誰でも Petro に就いては我々が既に話合つたか或は Petro がそこにゐた事を誰しも既に知つてゐるか或は Petro がそこに居らねばならなかつたかのいずれかの理由によつて Petro を別個に取扱つた事を容易に理解できませう。勿論 “krom” といふ語は時には不精密さや誤解を引惹すかもしれません。併しそんな場合には我々は “krom” といふ語を避けてその代りに一層精密な “esceptinte” 或は “ne sole, sed ankaŭ” なる云ひ表し方を用ひればなりません。 (La Revuo, 1908, Majo.)

目的格の代りの “al”

非常に多くの場合に於て前置詞 “al” が方向を云表はすために用ひられてよいのであります。併しあらゆる場合にかくすることができると云ふわけにはゆきません。“mi veturas Londonon” の代りに “mi veturas al Londono” と云ふことができます。併し若し “la muso kuris sub la lito” の代りに “al sub la lito” と云へば文の意味は少しく變化します。通常 “al” は單に目ざすこと (celado) 即ち或る場所への道を示すものでありますが一方目的格はそれ自身目的への到達の觀念を含んでゐます。従つて “muso kuris al sub la lito” といふ文は鼠が寢臺の下の方への方向に走つたが何等かの原因で寢臺の下の場所に到達しなかつたか或は少くとも我々がその到達を見なかつたことを示すものでせう。併し繰返へして申しますが多くの場合には “al” と目的格との差異は大變僅少であるので私も嘗つて適當な時に方向の目的格の代りに常に主格附の前置詞 “al” を使用できると云ふ共通の法則を提案しようと思つた位です。方向の目的格が難かしいと思ふ人々は今でも何等文法に反する罪を犯さずしてかゝる場合前置詞 “al” を用ひることができます。若し例へば “venu ĉi tien” の代りに “venu al ĉi tie” と云つたならばその文體は全く模範的のものとは云へませんが決して文法的の誤をしたと批難する事ができません。 (La Revuo, 1908, Majo.)

前置詞 “da”

私は “dum la frua parto da la jaro” と云ふ表現はよくないように思ひます。私は寧ろ “de la jaro” を用ひます。何となれば上述の文中の “parto” は數量を意味するのでなく或る限られた特別の部分 (limigita apartaĵo) を意味するのだからです。かくして例へば “monato” と云ふのは單に數量を表はすものだから “monato” estas parto da tempo. といへるが “Januaro” は數量を意味せずして特定の制限された特別のものを意味するが故に “Januaro” estas parto de jaro といふべきでありませう。そこで又 “kvaronjaro” (=mezuro) estas parto da jaro であるが併し “printempo” (=speciale montrita parto) estas parto de jaro であるのです。我々は “parto” “peco” 等の語は屢々數量の意味をもつてゐるが常にそうであるのではないと云ふ事を記憶せねばなりません。“da” なる語は(この語はかくれた “ia” の意味を含んでゐる)我々が或るものの量について話してゐる事を示すのでそのものの個性を示してゐないのであるし(例へば peco da viando=peco da ia viando), 冠詞 “la” は個別的に特定の事物——その一部分を我々がさつたのである(例へば peco de la viando, kiun mi havas antaŭ mi 即ち私の前に置てある其肉の一片)——(或は同種のすべての物)に就いて語つてゐる事を示すものであります。其故に我々は理論上は “da” と “la” との結合は禁じられてゐないが實際上は之等の結合は單に甚だ稀な場合のみに用ひられ得るにすぎないと云ふことができます。而してそれも甚だ稀な場合のみですから我々は寧ろ(意味上必ず全く疑もなく la が要求される場合を除いて)決して “la” の前へ “da” をおかないようにと簡単に勧告しても差支へない位であります。 (La Revuo, 1907, Junio.)

受身分詞の後の “de”

受身分詞の後の前置詞 “de” は常に唯發動者 (aganto) を示すのです。例へば “la libro estas legata de Adolfo” なる文の中の前置詞 “de” は Adolfo が讀むと云ふ動作をなす者であることを示してゐる

故東宮豐達君遺兒教育後援會

既に御承知の事と思ひますが、エス譯「宣言」を Internacia Mond-literaturo の一冊として、獨逸から出版しましたのを初めとして種々のエス譯、エス著のある熱心な又秀れた同志醫學士東宮豐達君は去る六月下旬死去されました。過去の業績によつて示された其の才幹と熱誠とに徴して、將來一層大きな期待を抱かれてゐたこの同志を斯の如く早く失ひました事は我がエスペラント界の爲實に痛惜に堪えぬ次第であります。

扨て同君の死後遺族としては夫人貴子氏と共に本年僅か七歳になられる一女エルザ嬢がありますが、このエルザ嬢の教育は同君が殊に心にかけて居られた事で、臨終にも親近者に其の關心を洩らされたと聞きます。

茲に於きまして私共同志は相談の上左記要領によりこのエルザ嬢のために教育後援會を起し、大方の同志諸氏にお願いして教育費の一部なりとも集めて之を遺族の方に贈呈する事を思ひ立ちました。これによつて一生をエスペラント事業に捧げたこの同志東宮君の生前の功績に對し、同志として些か感謝の意を表すると同時に、同君の靈を慰める一端とも致したいのであります。

何うか私共の微意を御諒察の上御賛同御助力下さいます様偏にお願い致す次第であります。

昭和二年九月

東京市外目白文化村五七 西成甫方

東宮豐達君遺兒教育後援會

發起人 (イロハ順)

| | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 伊藤德之助 | 石黒 修 | 西 成 甫 | 千布利雄 |
| 緒方知三郎 | 岡本好次 | 何 盛 三 | 梶 弘 和 |
| 高橋邦太郎 | 植田高三 | 倉地治夫 | 八木日出雄 |
| 藤澤親雄 | 古澤末治郎 | 淺井惠倫 | 杉若金一郎 |

寄附規定

- 一、寄附金額は一口二圓又は其れ以上のこと。
- 二、御送金は前記の會事務所へお宛て下さること。或はエスクラピーダ・クルーボ（振替番號東京七五五二五）へ御拂込下さること、但し其際は「東宮豐達君遺兒教育後援會へ寄附」の旨を振替用紙裏面の通信欄へ明記下さる事。
- 三、寄附者には記念として近く日本エスペラント學會から出版される筈の東宮君エス譯有島武郎氏著「惜しみなく愛は奪ふ」の特製本（四六版百二十頁）をつくつて贈呈すること。
- 四、一口三圓以上の寄附者に對しては右の外東宮君エス譯武者小路實篤氏脚本小集を出版の上贈呈するか又は他の記念品を贈呈すること。
- 五、締切 昭和二年十二月末日のこと。

寄附金處分

全額中から寄附者へ贈呈の遺著代及雜費を差引き殘額をエルザ嬢教育資金として東宮貴子氏に贈る。

會計及一般事務は發起人中 西、古澤の兩人が擔當します。



無代進呈

★エスペラントの『葉』(頒布會) 百枚以下無料(但送料卅枚毎に四錢) 百枚以上百枚毎に實費送料共六十五錢にて
 ★エスペラントの『チラシビラ』(街上展覽會等で) 三百枚以下無料(但送料百枚毎に二錢) 三百枚以上は百枚毎に實費送料共十錢にて
 宛會 常會 直接 宛申 限るに

日本風景風俗エハガキ

(四枚一組三色刷) (エス文) 價廿錢送料二錢 (説明付)

緑星章

甲種(安全ピン止) 價廿錢送料二錢 (説明付)
 乙種(背廣用) 共に一個の價 送料共三十錢
 丙種(安全ピン止・銀臺特製品) 一個五十錢送料六錢
 ★カウスボタン 一揃(箱入) 一圓二十錢送料六錢

緑星

旗(紙) (十枚送料) (共十五錢)

半紙大原紙兩面綠色刷、左角四分の一は白地に緑の星、殘四分三は緑の地にエスペラントと白く抜きたるもの。展覽會その他の祭タコアシに使用して好適。十枚以下賣りません。但し見本希望の方には郵券五錢送れば二枚送る。

★當會出版書籍はすべて直接當會宛前金にて注文に限り十部以上二割引(送料も當方負擔)★

エスペラント發音研究

(定價五十錢) (送料二錢) (發音上の疑問はすべて本書にて氷解)

エスペラントやさしい読み物

(特價二十錢) (送料二錢) (エス笑話二十二篇に懇切な譯と註を附す)

新撰エス和辭典

(定價七十五錢) (送料二錢) (語數一萬五千餘語、譯語正確、索出至便、附錄文法一覽)

エスペラント捷徑

(定價一圓) (送料六錢) (四六版百六十頁、獨習書中の白眉)

エスペラント講習用書

(定價五十錢) (送料四錢) (一萬部賣切を機として表紙を堅紙にし背をクローズに堅牢にせり)

エスペラント初等講座

(定價二十錢) (送料二錢) (外國語の素養の全然ない人のためにエス文法をさぐ)

エスペラント圖書一覽

東京市牛込區新小川町3の14(振替東京11325番)

財法人 日本エスペラント學會

新撰エス和辭典についてお願い

昨夏「新撰エス和辭典」を出版以來一ヶ年を経過致しました。其の間各地同志諸兄より多大の御好評と御好意によつて數版を重ねる事を得ましたことをここに深く御禮申上ます。扱同辭典出版以來見つかつた誤植はその都度正誤表を附してきましたが猶徹底的に譯語の正確を期する意味に於てこの際一年位の間にハツカリ譯語の妥當でないのを改めたいと思ひます。就きましては同辭典を御使用の都度變に感ぜられた箇所は之を書き記し本年中に當部宛御送り下さいませ。

東京市牛込區新小川町3の14

日本エスペラント學會編輯部

日本エスペラント學會取次圖書 (前金でなければ絶對に送本しません)

日本で出版のもの 定價 郵税

★ザメンホフ演説集 0.80 4錢
(エス文のみ)

★夜の空の星の如く 0.80 6錢
(上記演説和譯)

★緑の星に憧れて 1.20 8錢
(日本文)

★我國に於ける
★外國語問題とエス 0.60 4錢

★日本語エスぺ
★ラント小辭典 1.00 4錢

★新魔王(エス文) 0.30 2錢

★悪夢(エス文) 0.20 2錢

★醫學エスペラント文集 0.40 4錢

★ブレーメンの音樂師 0.15 2錢

★王様の新しい御衣 0.15 2錢

★燈臺守 0.45 2錢

★海の娘 1.20 6錢

★心の片隅 0.50 2錢

★詩集花束 0.80 4錢

★カル口 (四方堂版) 0.20 2錢

(振替送金最も確實)

◆取次圖書は日本のものに限り十部以上一割引(但し送料は御負擔下さるべき事)

◆大賣捌店を介しての注文の際は取次圖書は取扱はず(大賣捌店へ割引せればならぬため當學會の大損失をまねくから)

注意: 上記以外のエス書は本誌上廣告の圖書の外全然取扱はず。外國圖書も上記以外なし。

外國出版のもの (部數僅少 乞即時注文)

★Sankta Biblio 3.60 18錢

★Gemo de Unu Soleca
★Animo 0.90 4錢
「エロシエンコ氏の隨筆其他」

★Hinago 0.40 2錢
(Jack London 氏原作)

★Rakontoj 0.40 2錢
(Ĉeĥov 氏原作)

次の二種の辭書は故東宮氏が生前獨逸より輸入されたばかりの書籍です。御遺族の御依頼に應じて取次致します。兩方共廿部程ありますから御入用の方は學會へ御注文下さい。

★Bennemann 氏著: Esperanto-Handwörterbuch の II. Teil, Deutsch-Esperanto の部

一冊定價 4.00 圓 書留送料 18 錢
(大さ3.5寸×5.5寸 455頁。クロス綴堅牢優美)

獨エス辭典として Christaller の辭典と共に最良のもの。本誌五月號 115 頁に本辭典の recenzo が あり ます御覽下さい。

★Degen u. Kötz 氏共著: Hirts Esperanto-Taschenwörterbuch

(大さ 3.5 寸×5.5 寸 117 頁。堅表紙優美) 定價 65 錢 送料 4 錢

これはエデンバラのエス辭典に比すべきものでエス獨、獨エス兩方があつて體裁もよく印刷も鮮明である。

東京市牛込區
新小川町3の14

財團
法人

日本エスペラント學會

振替口座
東京 11325 番

◎國字問題解決の先驅◎

月刊雜誌

ローマ字世界

定價 一部十二錢
前年一圓貳錢

◎日本の國字となるべき名譽と運命をもつた日本式綴方によるローマ字の雜誌！
◎標準的綴方としての日本式ローマ字を應用し實際化したローマ字の雜誌を御覽なさい！
◎ローマ字の日本式綴方の論據、要點等に就ては郵券二錢を御送り下されば『ローマ字のすすめ』といふ小冊子を差上げます。

財団法人 日本ローマ字社
振替東京二一五〇四・電話小石川七〇一
東京市本郷區駒込曙町十一番地

ザ博士肖像(油繪)

- ①中垣虎兒郎氏揮毫
- ②畫面大さ1尺1寸×8寸
- ③揮毫料 5圓
- ④包裝送料 30錢

東京牛込區新小川町3の14
日本エスペラント學會事業部

講習 9月12日より二週間(午後七時)
東京市小石川區雜司ヶ谷125
城北エスペラント會

エス講習

東京における常設講習所です。
御照會下さいませ。規則書差し上げます
(來9月15日開講★月木・後七時)

東京市麴町區四番町九
エスペラント研究會

SAT Sennacieca Asocio Tutmonda
出版の書籍雜誌等取次ます。

東京市外淀橋柏木386

比嘉春潮

秋田雨雀・小坂狷二共著

模範エスペラント獨習

改訂第十八版

西洋の教科書の燒きなほしではない。語系を異にする日本人の爲めに全く新しい様式で講義されたものである。外國語の素養なき初學者も趣味のうちに習得が出来、既にエスペラントに熟達した人も他書に見出し得ぬ知識を求め得られる。〔布裝三八〇頁・定價二圓・書留送料十九錢〕

ブリヴァ著・松崎克己譯

愛の人ザメンホフ

他の萬國語が盡く失敗せる中にエスペラントのみひざり今日の隆盛あるは何故ぞ。それは此の語が優秀であるの幾多熱心の士が崇高なるエスペラント主義、即ち人類主義に感激し、身をすて、普及に努力し、努力しつつあるからである。人類主義の教科書たる本書二〇〇頁を讀むはエスペラント學習者の義務である。〔定價金一圓・書留送料十三錢〕

振替口座東京
四二八八九番

閣

文

叢

東京市牛込區
神樂町二丁目

安 田 共 經 營



共濟生命保險株式會社

(KJŌSAI VIVASEKURA KOMPANIO)

本 店 東京市日本橋區鎧河岸

電 話 茅 場 町 (66)
(代表) 1231, 1232, 1233,
1234, 1235, 873

支 店 東京、大阪、福岡、廣島、名古屋、仙臺、富山、
京都、小樽、神戸、鹿兒島、宇都宮、高松

出張所 大連、京城、臺北

社 長 安 田 善 五 郎
常務取締役 柳 谷 己 之 吉
同 佐 々 木 秀 司

Minacantaj Dangeretoj ĉiam nin atendas!

*Estonto negardata kondukas nin en la labirintan rojon
de l' eterna mallumo!*

*Estonto firmigita kondukas nin en la larĝan rojon de
l' brilanta feliĉo!*

*Brilantan estonton kaj feliĉan estonton garantias asekuro
nur sola.*

*Esperantistoj, kiuj havas esperon en estonteco,
senprokraste sin turnu al asekuro.*

不安多きは人生の常。

準備なき未來は常暗への迷路。

確固たる未來は幸福への大道。

華やかなる未來幸多き未來は保險によつて確保
さるのみ。

未來に多くの希望を有するエスぺランチス
ト諸君は一日も早く保險を。

我國におけるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

財團法人日本エスペラント學會

【東京市牛込區新小川町三の十四】 【振替口座東京 11325 番】

◆すべての運動は大衆の協力に俟たねばならぬ。今やエスペラント普及運動は最も多衆の協力を必要とする時だ。各地同志の大同團結が必要だ。個々人の叫びは個々人の叫びにすぎない。大衆の叫びは輿論の喚起だ。組織だつた協力こそ眞の力だ。

◆エスペラントを愛するものは誰しも御入會下さい。(會員は法規上維持員とよぶ)

目 的 エスペラントの普及・研究・實用

事業 (a) エスペラントに關する各種の研究調査及其發表
(b) 雜誌及圖書の刊行等
(c) 講演會、講習會の開催及後援
(d) 其他本會の目的を達成するに必要と認むる事業

會 費 (a) 普通會員 年額2圓40錢 (b) 贊助會員 年額5圓
(c) 特別會員 年額10圓以上 (d) 終身會員 一時金100圓

入會手續 住所、職業、姓名(振カナ付)を明記し會費一年分を支拂へばよい。
振替送金最も安全)

會 員 の 典 1. 毎月研究雜誌“La Revuo Orienta”の配布をうく
2. 出版圖書の割引をうくることあり
3. 語學上の質疑其他一般の問合の返事をうく
4. 宣傳の「榮」その他宣傳材料を無料でうくることを得

詳しいことは直接御問合せ下さい

役員名簿 (五十音順)

| | | | | | |
|-----|----------|---------|-----|------------|---------|
| 理事長 | 理 學 博 士 | 中村 精 男 | 理 事 | 帝大教授醫學博士 | 西 成 甫 |
| 理 事 | | 上 野 孝 男 | | | 美野田琢磨 |
| 同 | 元鐵道省運輸局長 | 種 田 虎 雄 | 同 | 慶大教授醫學博士 | 望月周三郎 |
| 同 | 東京女子大學教授 | 河 崎 な つ | 同 | 東京朝日新聞顧問 | 柳 田 國 男 |
| 同 | 中央大學教授 | 川原次吉郎 | 同 | | 大 井 學 |
| 同 | | 何 盛 三 | 同 | 事 高層氣象臺長 | 三 石 五 六 |
| 同 | 帝大教授文學博士 | 黒 板 勝 美 | 同 | 神奈川縣立農業學校長 | 大石和三郎 |
| 同 | 政治教育會會長 | 小林鐵太郎 | 同 | | 清水勝雄 |
| 同 | 政修大學教授 | | 同 | 顧問 帝大教授 | 木 崎 宏 |
| 同 | 帝大名譽教授 | 高楠順次郎 | 同 | 子 學博士 教 男 | 穂 積 重 遠 |
| 同 | 文 學 博 士 | | 同 | | 三 島 章 道 |

| 本誌購讀料 (郵税共) | | 本會振替號 | 廣 告 料 | | | | | 編輯兼
發行人 | 印刷所 | 印刷人 | 發行所 |
|-------------|---------|--------------|-------|------|-------|-------|----------------------------------------------------------------|----------------|---------------|---------------|----------------|
| 一部 | 24 錢 | | 1回 | 3回 | 6回 | 12回 | ◆金銭に關係なき廣告四割引
◆表紙第三頁は二割増の事
◆表紙第二頁第四頁はお断り
◆特別會員の廣告は二割引 | | | | |
| 半年分 | 圓 錢 140 | 會計用(東京一二三三番) | 全頁 25 | 圓 72 | 圓 140 | 圓 250 | | 大 井 學 | 株式會社一匡印刷所 | 高 見 澤 保 芳 | 財團法人日本エスペラント學會 |
| 一年分 | 圓 錢 260 | 學會々員には無代頒布す | 半頁 13 | 圓 37 | 圓 74 | 圓 130 | | 東京市牛込區新小川町三ノ十四 | 東京市神田區西小川町二ノ五 | 東京市神田區西小川町二ノ五 | 東京市牛込區新小川町三ノ十四 |
| | | 基本金專用東京三〇九番 | 四半頁 7 | 圓 19 | 圓 38 | 圓 70 | | | | | 電話九段(三三)二四一八番 |